江南町文化財調査報告　第６集

— 昭和６０年度調査 —

江南町内遺跡群Ⅲ

（新　山　遺　跡）

１９８６

埼玉県大里郡江南町教育委員会

序

江南町となって、早くも2年を過ぎ、時の経過の早いことに今さら驚きます。小江川の山林中に1400年前の境墓や、江戸時代の塚が今回の調査によって明らかになりました。祖先の営みが確かにあった、この発見には深い感慨を憶えます。林道の閉鎖に当っては、塚の調査に十分留意し、多くの成果を得ました。かって村境を守ってくれた庚申様には、新装した林道を見守りいただくよう祈ります。

炎暑と藪蚊に悩まされながら現地の調査に当られた学生作業員の方々に深く感謝いたします。またこの発掘の成果が、ぜひ活用されますことをお願い申し上げます。

昭和61年12月

江南町教育委員会

教育長　細　井　　多

例　　言

1.　本書は農業振興事業の一環として実施された農村総合整備モデル事業・連絡農道推進事業に伴う昭和60年度分の江南町内遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は埼玉県教育局指導部文化財保護課の指導のもと江南町教育委員会が主体となって実施した。　　予算については国庫及び県費の補助を受けた。

3.　調査にかかる遺跡の名称と所在は次のとおりである。

新山（しんやま）遺跡　埼玉遺跡№65－209

江南町大字小江川字新山1647番地他

4.　調査主体者　江南町教育委員会　教育長　　小島　孫一　（前任）

細井　多　　（現在）

事務局　　江南町教育委員会社会教育係

教育次長　高橋　　正

社会教育主事　岡田恒雄

〃　　横山舜一

主　　事　鹿庭栄子

新　井　端

5.　発掘調査は新井端が担当した。調査員には新島喜久雄の協力を得た。

6.　発掘調査の実施に当っては以下の方々の協力を得た。

新井　勤・井上　進・小久保　聡・柴田　清・橋本克之・松本賢治・吉田　隆・持田秀樹

福田寛治・水野幸延

須永　健・田端辰己・新井孝雄・小川由紀子・金子とき枝・米元絵理佳（以上立正大学生）

7.　本書の執筆は新井　端・新島喜久雄が分担した。写真撮影、遺物の実測は新井　端が行った。整理作業・図版作成に当たっては高橋史朗（立正大学学生）・内間　靖（立正大学卒業生）福島和子・神谷君子・志村もと子・橋本紀子の協力があった。

8.　本報告書作成にあたっては、次の方々及び機関の御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

小江川区長　　金井塚良一　　寺社下博　　植木　弘　　宮嶋　秀夫　　木村　俊彦

村松　　篤　　村上　伸二

（敬称略）

目　　次

1986. 新　山

序

例　　言

第Ⅰ章　新山遺跡の調査経過 …… 1
第Ⅱ章　新山遺跡の立地と環境
　第1節　地理的環境と地区の生活 …… 2
　第2節　歴史環境と遺跡の分布 …… 6
第Ⅲ章　新山遺跡の調査の概要
　第1節　近世の塚と出土遺物 …… 9
　第2節　第6号墳 …… 18
　第3節　一括出土の遺物 …… 21
第Ⅳ章　発掘調査の整理と考察
　第1節　新山遺跡の方形周溝墓について …… 34
　第2節　新山遺跡の庚申塔と塚について …… 38
第Ⅴ章　まとめ …… 49

表　目　次

第1表　新山遺跡出土古銭観察表 …… 16
第2表　新山遺跡出土土器観察表 …… 25.26
第3表　新山遺跡出土石器観察表 …… 32・33
第4表　発掘調査の実施された近世塚群 …… 50～55

図 版 目 次

図版１　北面より見た遺跡の位置（左）・南面より見た遺跡の位置（右）
図版２　１、２号塚　調査前　・３、４号塚調査前
図版３　第５号塚　調査前　・第６号墳　調査前
図版４　第６号墳Ｉ・Ｉ′トレンチ　・第６号墳　南西部周溝
図版５　第５号塚盛土、第５号塚下層集石、第５号塚上の庚申塔、集石中古銭出土状態、西ノ台第２号塚上の庚申塔
図版６　塚出土　古銭、硬貨
図版７　キザミ目のある土器　・炭化物の付着する土器
図版８　調査区出土縄文土器　・表採砥石、第６号墳出土土師器
図版９　礫器
図版10　礫器、磨石、他
図版11　調査風景

挿 図 目 次

第１図　江南町南部の遺跡分布図
第２図　遺跡の分布図
第３図　新山塚群の分布図
第４図　新山５号塚下層集石
第５図　新山３号・４号塚土層図
第６図　新山３号・５号塚土層図
第７図　新山４号・５号塚土層図
第８図　新山５号塚上庚申塔
第９図　新山遺跡出土古銭
第10図　新山第６号墳トレンチ・土層図
第11図　新山第６号墳土層図
第12図　新山第６号墳土層図
第13図　新山遺跡出土縄文土器
第14図　新山遺跡出土遺物
　　新山遺跡第6号墳出土遺物
第15図　新山遺跡出土遺物
第16図　新山遺跡出土石器
第17図　新山遺跡出土石器
第18図　新山遺跡出土石器
第19図　新山遺跡出土石器
第20図　新山遺跡出土石器
第21図　新山遺跡出土石器
第22図　近世塚群参考図(1)
第23図　近世塚群参考図(2)
第24図　庚申塔

第Ⅰ章　新山遺跡の調査経過

江南町では昭和56年度に計画の決定をみた「江南村農村総合整備計画書」に基づいて、小規模土地改良事業、排水路整備事業、農道整備事業等の諸事業が毎年実施されてきた。昭和60年度は、事業予定地内の５ケ所の試掘調査と本遺跡の発掘調査を行った。これらは、大字上新田地区、大字樋春地区、大字小江川地区に当たっていた。

発掘調査を実施した新山遺跡は大字小江川•西ノ台•新山に位置する。赤松とクヌギ、コナラの繁る林のため遺物の表採は不可能だが、幅2.5m程の林道両側に南2基、北3基の塚の所在は、確認されていた。この5基が新山塚群で、さらに滑川町方面へ進んだ場所に5基から成る西ノ台塚群が所在している。

工事計画では小江川、西の集落より滑川町境へ通ずる延長約780mの農道を幅8mに拡幅する事業であり、遺跡の所在する範囲が丘陵頂部付近に当たるため大きく削平さることになっていた。西ノ台塚群は、影響はないが新山塚群は旧道を挟んでいるため、塚すべての保存は困難で、１、２号塚を現状保存とし3～5号塚を含む地域2000㎡を調査範囲とした。また、道路延長部分にも所々に６ケ所のトレンチ坑を設定し遺跡の範囲を明確にすることに努めた。調査期間は30日の予定とした。

現場への着手は7月末からで、荒れた山林の伐採清掃から始めた。途中5号塚の北側に規模の大きい古墳状の隆起が見つかり、６号塚とした。（６号塚は後に方形周溝墓の可能性が高まり６号墳とした）調査に当たっては、塚の規模、性格、古墳の可能性の有無を明らかにすることに主眼を置き区域外を含めた詳細な現状の測量調査を行った。（付図）

８月上旬には測量を終了し、３～５号塚の発掘に入った。測量は約2000㎡、20㎝コンタ、1／50とし、使用した基準杭は、平面直角座標に基づくもので、Ｂ５杭は、X=10924.923、Y=−45235.621、h=82.620である。３～５号塚は墳頂部の中心を四至に分割。（トレンチ及び土層観察用の畝とした。）

8月中旬、５号塚の盛土中より多数の縄文土器、石器が出土する。３号塚上より寛永通宝出土。４号塚上に台石検出。３～５号塚とも主体部の存在はなく、近世の塚である可能性が強まる。

８月16日、５号塚の構築面に小規模な集石遺構が発見され、寛永通宝数枚の出土を見た。これは６号塚の構築年代を知る決定的な資料といえる。３号塚の構築面からも寛永通宝の出土があった。

8月下旬、３～５号塚の発掘、実測がほぼ完了する。6号塚は工事範囲の外に位置するが、部分的にトレンチ坑を設定し、規模、性格の把握を行うことにした。３、４、５トレンチで周溝墓である可能性を想定し始めた。６号墳は現状で保存されるためトレンチ以上の発掘は控え、規模の確認と時代の決め手となる土器の検出に努め、一応の成果を得た。

９月４日にすべての調査、再確認を終え現場での作業を終了した。

10月までに水洗い、注記は済ませたが、10月以降民間事業の対応に追われ、何もできぬまま年度末を迎えた。本文の推敲、図版の作成、等は新年度になってやっと着手できた。

工事は10月中に着工され、当初の計画のとおり削平が行われ３～５号塚は完全に消滅した。昭和61年５月の現状では、調査部分は旧地表より1.0～1.2m削平され松林を分断する帯のように横たわり、黄色いロームの山肌に敷かれた角ばった砂利がにぶく照り返している。再び祀られた庚申塔と馬頭観世音は新しくなった道を見守り続けている。

第Ⅱ章　新山遺跡の立地と環境

第1節　地理的環境と地区の生活

荒川の名に由来する江南町は、昭和60年11月１日に町制が施かれ、町として新たな歴史を歩み始めた。新たな門出に当たり現在の江南町の姿を概観してみよう。

町の中央は大字柴９番１号で、ほぼ現在の役場付近にある。ここは東経139度20分　北緯36度７分である。真西に福井県永平寺、さらに西は地中海地方、アメリカはグランドキャニオンのあるコロラド地方と同緯度に当たり、春分、秋分の日には同じ位置を太陽が通る。

江南町は埼玉県の中央部に位置し、その流れを東西に横たえている荒川の中流地域にある。鉄道は高崎線熊谷駅へ６㎞、東武東上線森林公園駅へ9㎞の距離にある。関越高速自動車道花園インターへ11㎞、東松山インターへ11㎞である。町の東部を国道407号が通り、荒川大橋から国道140号へ接続している。町の主要幹線道路は、３本の県道で、東西を走る熊谷－小川線、熊谷－本畠線と南北を走る深谷－東松山線があり、この２路線にはバスが運行している。押切冠水橋は、架けかえの予定である。

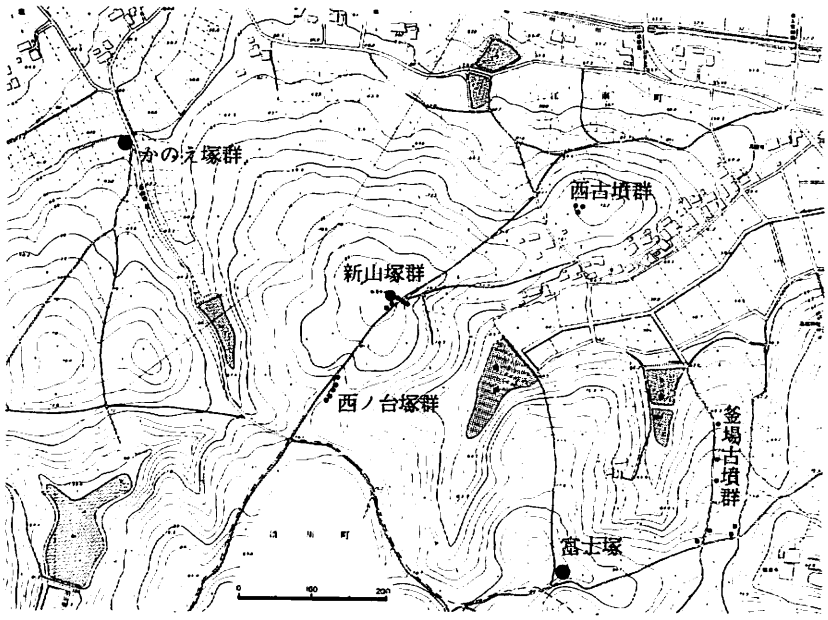
江南町の景観は、山林等の緑地域、畑地水田の農業用地、工場などの工業用地、居住生活用地の類型に分けることができ、その比率は、24：38：8：12ほどになる。この類型をさらに詳しく見ると、農業用地は水田の場合90％の圃場整備、暗渠排水を終え、合理化された機械化集団による、組合経営という大規模で効率的な経営を行い、米麦耕作の他、畑地を含めて、キュウイ・ブロッコリー、栗、大豆、麦等の商品作物の育成に力を入れている。

また、農業教育センター、畜産試験場などの県立の機関も指導的な役割を果している。養蚕は減少しているとはいえ、まだまだ主要な位置にある。かつての畑地は、ほとんど桑畑といって良いほどであるが、野菜づくりに転換する場合が多く見られる。農業の面では旧来の純農業に依存した経営から、合理化の完了した農業経営へと脱皮しているようだ。特に生産単位をまとめ、いち速く集団経営をとり入れるなど、省力化、合理化をすすめ、生産指導に力を入れているようだ。

工業用地は、従業員30名を超える事業所、工場が、15社を数え、昼間人口の3割程度を占めている。工業圏は安定した成長と操業を維持しており、都市化に伴う居住生活圏の整備が急がれる状況にある。

居住生活用地は、熊谷市に近い町西部から宅地化が進んでいる。。さらに町中央部は、都市計画に基づく区画整理が行われており、市街化をなすことが予想されている。小学校２校、中学校1校、町民体育館、運動公園といった教育、福祉施設があり、今後、さらに公民館、図書館、博物館といった施設の充実が計られると思われる。

人口は61年４月現在で10493名で、10年前は8595名であるから、2000人近くの、新住民が加わっていることになる。この方々に江南町を知っていただき、気持良く生活できる町づくりが、教育、福祉、生活などに渡って進められている。さらに、これらの領域圏をとりまく緑の林地を、減少傾向の中からどう保存し、どう生かして、他の領域圏と調和を取って行くのか、これからの町づくりに必須な視点ではないだろうか。緑の林を排してしまっては、農業圏、工業圏、居住生活圏との潤

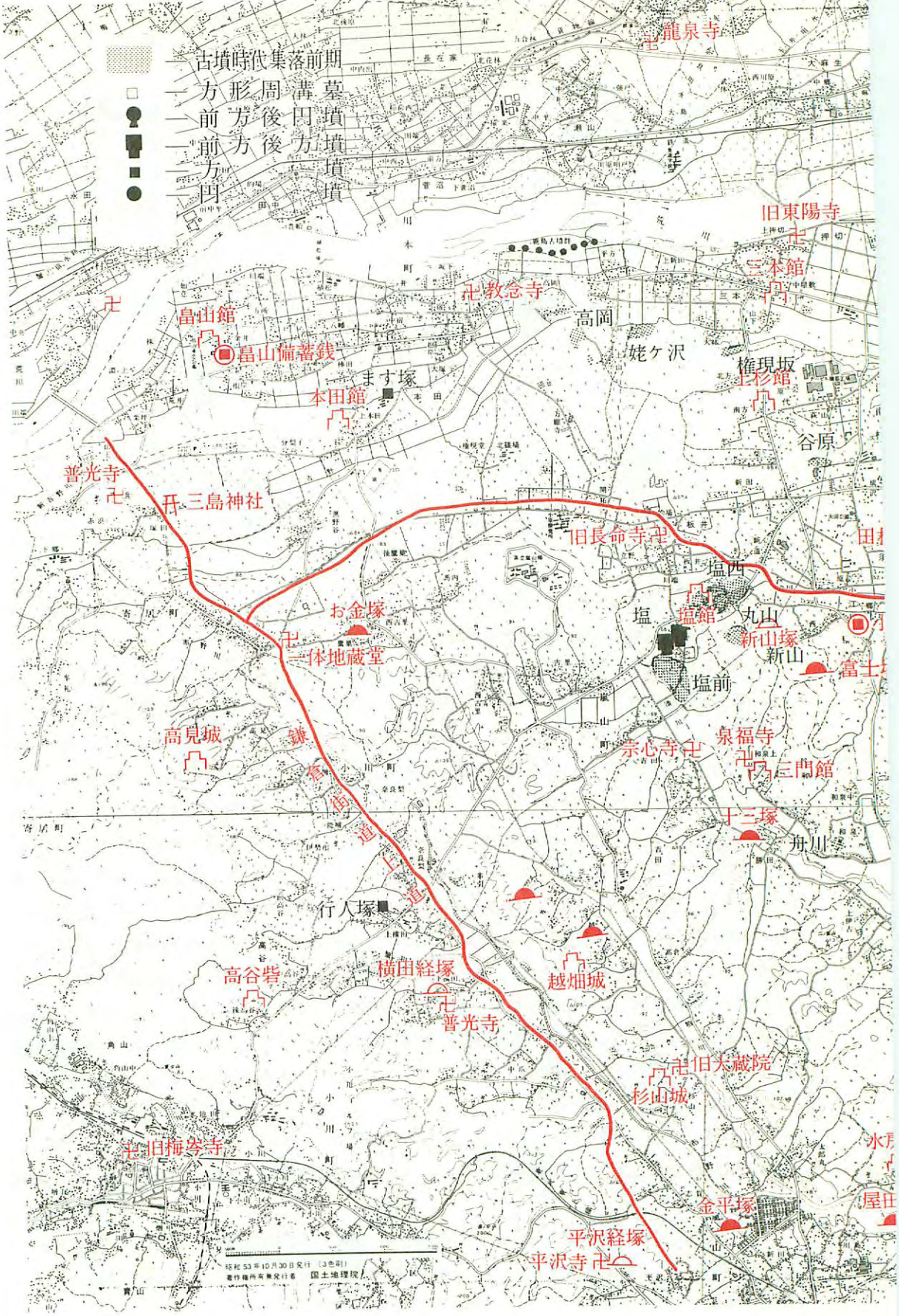


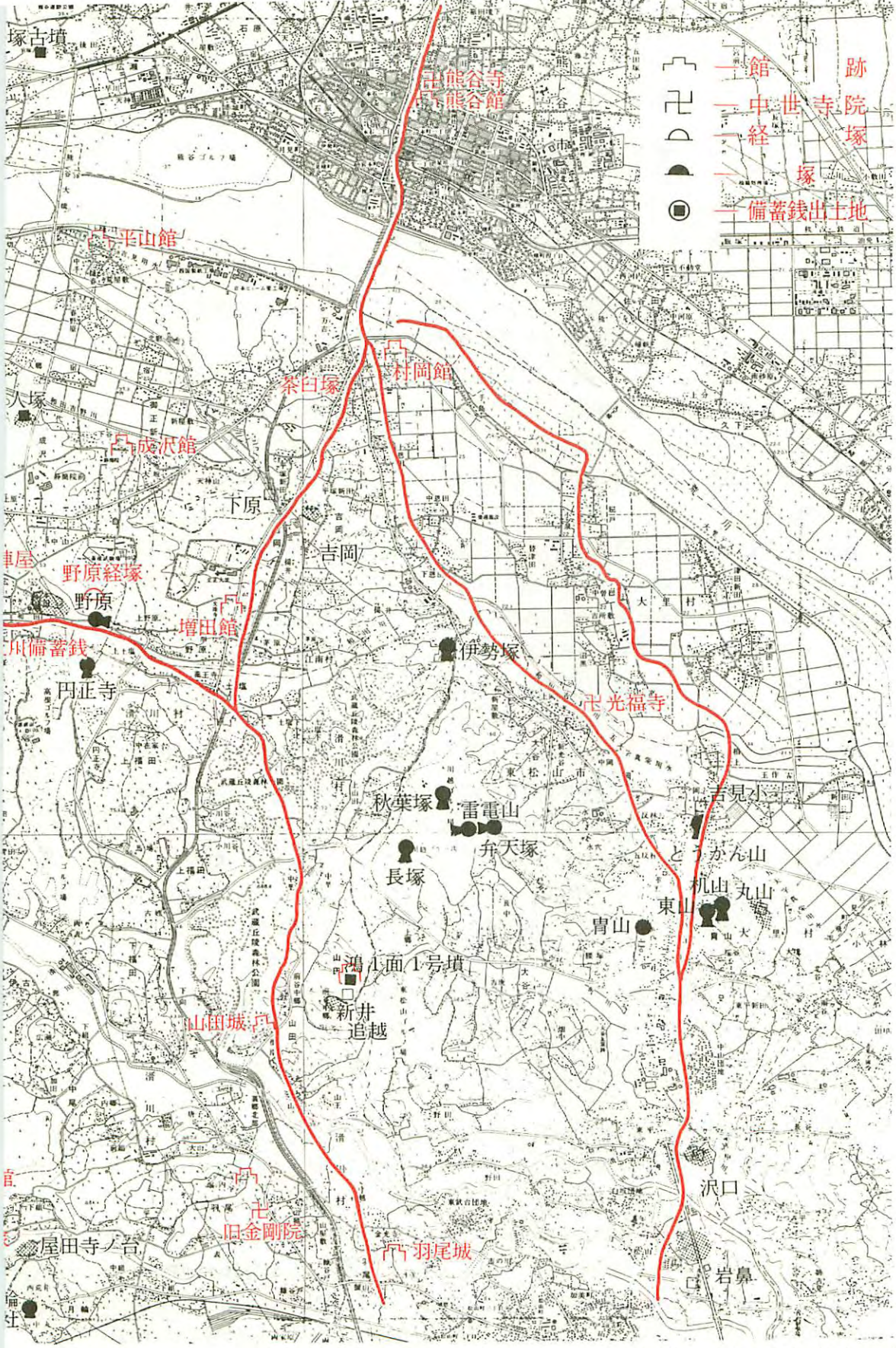
第1図　塚群の分布

滑油が失われ、貴重な自然の喪失と共に、互いの齟齬を大きくしてしまうだろう。そのような、ギスギスときしむ江南町の姿は避けたいと願うところです。

江南町の地形は北から、荒川、沖積地、台地、丘陵地と階段を登るような高低差がある。沖積地は、肥沃な穀倉地帯となっていて、町の全面積の2／5を占めている。荒川の氾濫源のため、先史時代の遺跡は少なく古墳時代以降の集落、城跡などが知られているだけである。その数は、数ケ所程度で多くない。上新田、三本、押切、樋春、御正新田、成沢の一部がこの地域に入っている。台地の割合は2／5で、洪積世の火山灰層が厚く堆積し、起伏が少なく平地林が発達している。浅い浸食谷が入り込み、これに沿って旧石器時代以降の遺跡が数多く残されている。集落36ケ所、古墳約80基、館城跡、寺院跡など分布している。過去に岩比田、本田東台、南方、上前原、宮脇、熊野、荒神脇などで発掘調査を行い縄文、古墳～奈良、平安時代の住居跡を多数発見している。現在の千代、柴、板井、須賀広、野原と成沢、小江川の一部が、この地域に入っている。丘陵地は、1／5を占め、台地域とは、和田川を境としている。ここは、比企丘陵の北縁部分に当たり、最高位の高根山より派生する丘陵と、滑川町和泉より派生する２つの丘陵部分の尾根と、支谷によって形成されている。隣接する滑川町とは、この２つの丘陵部分の尾根筋によって区分され、嵐山町とは、西側の谷を流れる滑川で区分されている。遺跡は、和泉方面より派生する丘陵部分に位置し、北側へゆるやかな斜面となって移行している。また、これらの谷の奥には、たいてい溜池が作られていて、谷につくられた水田の用水として使われていた。これらの沼の成立は、ほとんど不明だが、滑川町には、これらの沼や谷を望む丘陵上に弥生時代以降いくつもの小さな集落が、営まれているため、古い時期に作られた可能性もある。

先年、滑川町で調査された、追越・新井遺跡では、丘陵上、斜面に弥生～古墳時代初頭の集落、墓域が団地のごとく発掘され注目された。江南町塩地域の丘陵、山林中には、前期古墳の可能性が強く指摘される塩古墳群をはじめ、古墳時代に係る遺跡が知られている。


古墳時代集落前期
方形周溝墓
前方後円墳
前方後方墳
方墳
円墳
龍泉寺
旧東陽寺
三本館
教念寺
高岡
畠山館
畠山備蓄銭
ます塚
本田館
姥ケ沢
権現坂
上杉館
谷原
普光寺
三島神社
旧長命寺
塩西
塩館
塩
丸山
新山塚
新山
富士
お金塚
三体地蔵堂
塩前
高見城
鎌倉街道上道
宗心寺
泉福寺
三門館
十三塚
舟川
行人塚
横田経塚
高谷砦
越畑城
普光寺
旧大蔵院
杉山城
旧梅岑寺
金平塚
平沢経塚
平沢寺



第2図　遺跡の分布（1／50,000）

第2節　歴史環境と遺跡の分布

古墳時代の荒川右岸地域から比企丘陵にかけて、多くの遺跡が残されている。中でも塩古墳群を中心とした古墳時代前期の遺跡が塩地域に密集している。塩地域は南西を滑川沖積地に、北東は和田川に面する狭長な谷田に臨んでいる。比高差2－18m程の丘陵斜面に古墳、集落跡が散在する。最近の調査により、塩西・丸山・塩前遺跡では五領－和泉期の住居跡が、塩西では周溝のみだが方形周溝墓も発掘されており、塩古墳群中の第Ⅰ支群は前方後方墳と方墳群であって、時期を古く考えて良いことの傍証となっている。さらに、第Ⅰ支群のNo137号墳の調査では方形の周溝と木棺直葬の主体部が検出され、若干の盛土を有していることなど五領期の墳墓が塩古墳群に含まれていることが判明している。第Ⅰ支群に連続する丘陵には、5支群70余基に及ぶ古墳が現存しており、137号墳のよう方形周溝墓と考えられる小規模な低墳丘墳を始め、胴張を持つ切石積の横穴式石室古墳まで、古墳時代を通じて塩地域の小首長とその一族の造墓が行われている。周辺地域では嵐山町北田遺跡、江南町原谷遺跡、行人塚遺跡、熊谷市万吉下原遺跡、吉岡浄水道地内遺跡等に同時期の遺跡が知られている。江南町内に所在する原谷遺跡と行人塚遺跡は、台地中央部を浸食した谷津の奥部と開口部付近に当る。両遺跡とも五領式土器を多数出土している。嵐山町、熊谷市内の遺跡は未報告だが、住居跡・方形周溝墓等が調査されているという。荒川の沖積地には該期の遺跡は認められないが、前述の遺跡中には台地縁辺に立地している姥ヶ沢、行人塚、万吉下原、大里村舟木・丸山遺跡等があり、荒川沖積地の開発も積極的に進められていると考えられる。

塩地域と行人塚地域は約3km離れた隣のムラといった位置にあるが、塩古墳群ほどの規模を有する墓域や、前方後方墳、前方後円墳は確認されていないため同時期の集団間にある程度の階層差を予想できよう。行人塚遺跡の方墳は時期を特定できない。周辺に存在する方墳の例は川本町ます塚、小川町行人塚古墳、東松山市鴻ノ面1号墳、熊谷市宮塚古墳などがある。従来、方墳というと古墳時代終末期にかかるとされ、あるいは中近世の塚と考えることが多かった。しかし、吉見町山ノ根1号・2号また、塩古墳群第Ⅰ支群の前方後円墳と方墳にみるように、墳形や時期については改めて調査・検討が必要になっている。

和田川は塩古墳群に南面して流れ、以下、小江川古墳（円墳直径約30m）、野原前方後円墳、円照寺前方後円墳、楊井古墳群、三千塚古墳群、とうかん山古墳等を流域に持ち、市野川と合流する。この流域では三千塚古墳群中の電雷山古墳以後、前述の前方後円墳が築造され始めるまで小首長の造墓は明らかになっていない。

新山遺跡を含む江南町小江川は、中世水房荘に属し、滑川町和泉、羽尾付近までを荘域としていた。滑川町山田から江南町にかけて鎌倉街道の脇道と推定される古道が残っている。これは、上道より分れた往路で、和田川を渡る滑川町土塩付近で分岐し、野原、村岡を経て熊谷へ至る道と、和田川沿に須賀広・小江川・板井を経て、川本町本田、寄居町今市へ至る道が推定されている。前頁の地図に見るように、多くの中、近世の遺跡が分布している。野原に所在する増田館は分岐点上にあり、居住者とされる増田氏は小川町高見城に関係し、野原からの眺望も良い。居館跡は東西350m南北300mに及ぶ方形を呈しており、特異な性格が窺える。内部には増田氏中興開基になる文殊

寺が所在する。小江川には居館跡は見当らない。地区内に所在する2寺は、文殊寺同様室町末の成立でいづれも文殊寺の末寺である。

小江川は、徳川氏関東入国の頃は「老川の郷」と称されたらしく、武川衆知行御書出に「のはらすかひろ　せんたい」と伴に知行地に当られた。江戸期には、正保～元禄年間まで稲垣若狭守の所領であったが、その後、青山、内藤氏と旗本各氏が入れ替った。稲垣氏は、隣接する野原、須賀広も同時に所領しており、代官として田村氏が須賀広の地に陣屋を構え、現地の政治に当った。遺構は現在も伝承と伴に現存している。田村氏は約50年間に渡り領内を良く治め、同所保泉寺、満賛寺を中興している。旧村の須賀広と成沢境の往路に置かれていた庚申塔が、道路改修後須賀広・釈迦寺（天台宗）に移された。この庚申塔は江南町に例のない優品で他の当地作品とは全く異なっている。銘文によると延宝4年（1676）に造立され、主尊は文字で「南無青面金剛守御所」とあり、施主は修験僧都(?)を筆頭に田村姓の2名が名を連ねる。新山所在の庚申塔は延宝8年（1680）の造立であり、須賀広庚申塔より4年後、主尊は「奉待庚申後生善所」と類似している。さらに、所領の南北を通る往路上の村境に両庚申塔が所在することは、造立の動機を窺い知る一助となろう。

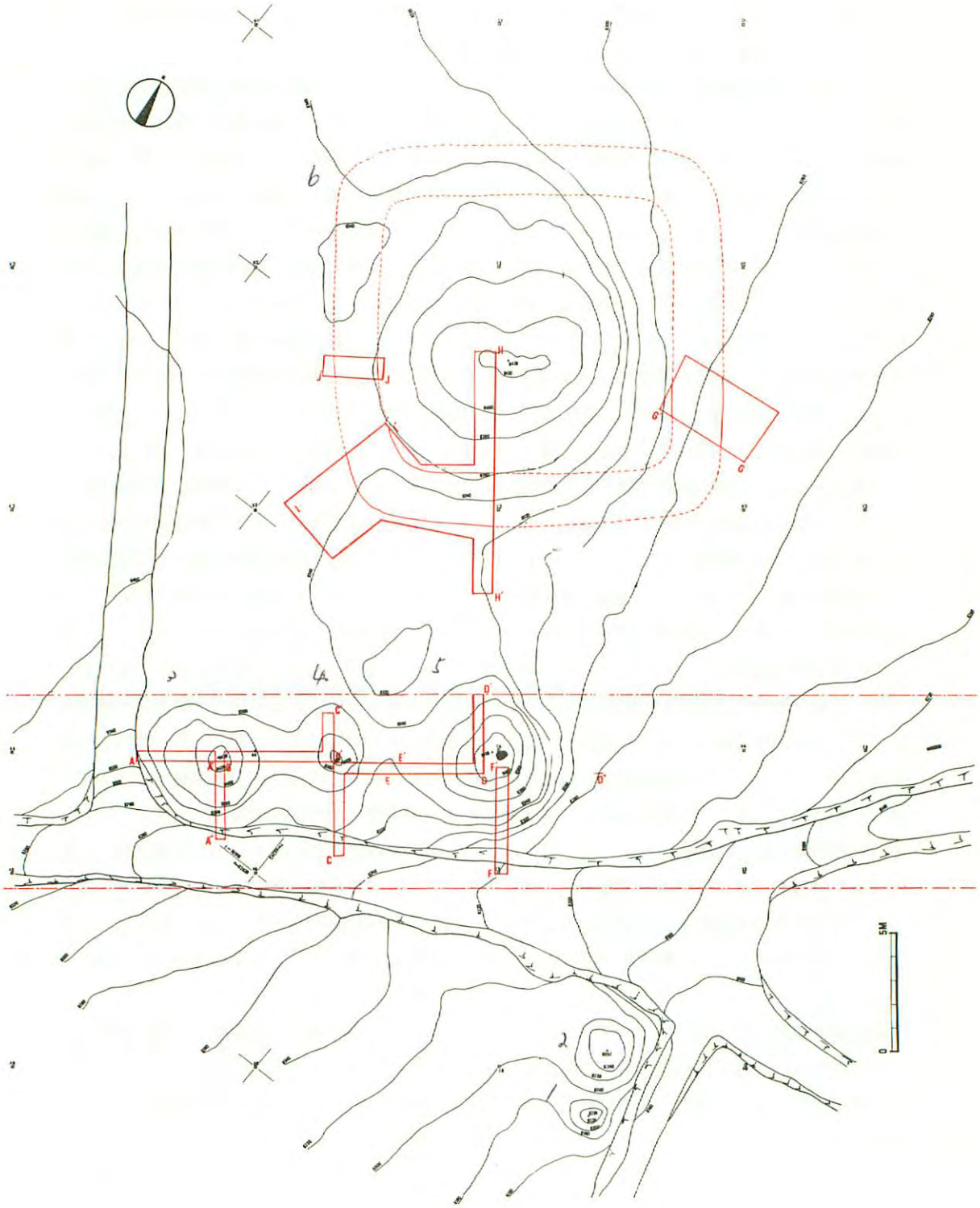
江南町板井は、中世篠場荘に属し、川本町本田周辺まで含めていた。ここに中世以来修験寺院として格式の高い長命寺が明治まで存続していた。残された古文書は天文・天正・慶長期が多く、僧・寺院の格式や勢力範囲を知ることができる。長命寺は天台宗系の本山派修験に属し、京都園城寺末の聖護院の統制下にあった。当時、関東の修験は、本山派が多く、後北条氏はこれを保護し、情報の収集に当らせた。徳川氏も修験を従前のままとした。県内は6ヶ所の寺や坊を先達として、輩下の中小寺院を管掌していた。江戸末期には県内に241ヶ寺の輩下があり、先の6ヶ所の先達を含め各地方の有力寺院が各輩下の寺院を支配していた。長命寺は所在地である男衾郡と榛沢郡・幡羅郡の一部になる田中・瀬山・菅沼・瓶尻での富士・三島の先達・檀那職と男衾郡と上比企郡内の年行事職を有していた。小川町旧梅芩寺、嵐山町旧大蔵院などは輩下であった。旧大蔵院には庚申講の書付が残されている。大里郡内には、江南町押切所在の旧東陽寺が本山派に属し、支配していた。江戸時代後期には、江南町千代より富士信仰にかかる山梨県南都留郡の三ツ峠山を中興開基した空胎上人が輩出しており。江南町とその周辺では中世以来宗教的な活動が著しい。その反面、武蔵武士といわれる在地の豪族層の伝承はほとんどなく、現在残る居館跡の主はほとんど不詳である。板碑や大寺院の伝承などの宗教活動の隆勢を示す事象と在地武士層の不在・埋没化は江南町の特色といって良い。

新山遺跡周辺（第１図）には、十三塚の伝承を持つ塚群や、富士塚の伝承を持つ大型の塚がいくつか存在する。これらは往路に沿って所在し、村境あるいは村境へ至る周辺に立地している。新山から滑川町和泉へ至る途中、滑川町側でも庚申塔を造立していた。さらに進み嵐山町勝田には十三塚が存在している。

（新井）

文献

古墳時代については第Ⅳ章と共通する部分があるため48頁に一括した。



第3図　新山遺跡全測図（1／250）

第Ⅲ章　新山遺跡の調査概要

新山遺跡は、以前から、５基で構成されるＡ群と５基で構成されるＢ群の近世塚群として周知されていた。今回の調査に伴い、Ｂ群の３基と、６号墳の存在（方形周溝墓）の他、縄文時代の集落跡の存在を確かめることができた。調査部分は丘陵頂部の南寄りに当たるので、遺跡の広がりは東側・北側に伸びることが予想されている。

調査は、Ｂ塚群の所在する延長50m、拡幅８mの路線部分を中心に行い、現況測量後、３号・４号・５号塚の発掘調査を実施した。５号塚の構築面上には集石があり古銭を伴っていた。遺物は塚に伴う古銭の他、石器96点、縄文土器182片、土師器30片等が出土している。　（新井）

第１節　近世の塚と出土遺物

塚の分布

新山遺跡の塚群（Ｂ群）は、江南町小江川より滑川町和泉へ抜けるいわば峠道の頂手前に所在し、小江川西の集落から登る表道（南側）と裏道（北側）の合流する位置に新山群の塚5基が道を挟んで北－３基、南－２基がある。各塚とも等間隔で並列している。西ノ台群（Ａ群）は峠を降り始めた位置に6基並列するが、不等間隔である。塚上には石造物が造立される塚があり、西ノ台群中の２号塚、新山群中の５号塚上にそれぞれ庚申塔が造立されている。　（新井）

新山遺跡の塚一覧

Ａ（西ノ台群）直径×高さ、m			Ｂ（新山群）		
１号塚	４×0.8		１号塚	2.5×0.5	
２号塚	６×1.0	庚申塔アリ、桜	２号塚	3.0×0.6	五輪塔頭部アリ
３号塚	３×0.6		３号塚	4.4×4.1×0.9	ウラジロ
４号塚	８×1.2	さかき	４号塚	4.6×4.0×0.9	台石、ウラジロ
５号塚	８×1.2	杉	５号塚	5.7×5.4×1.2	庚申塔、杉
			６号塚(墳)		方形周溝墓

西ノ台群の塚

１号、３号塚は直径４m、高さ0.8m程の小規模低墳丘をなすが地膨れ状でなく明らかに盛土の形をしている。２号塚は直径6m、高さ１.0mの円形で中規模に属す。墳頂には風化の著しい石造物が造立されている。石質は地元小江川から切り出される凝灰質砂岩である。尊像の表現から青面金剛の立像と推定できるので庚申塔として良い。４号、５号墳は新山遺跡では大型の一群となり、直径８m、高さ1.2mの規模は小古墳として良いかもしれない。この２基だけは１～３号と直線的に並ばないことも、何か造立の契機、性格に差を感じさせるが、近世以降は塚として意識されていたらしい。４号塚に「さかき」の木が植えられていることも意識の現れと考えたい。　（新井）

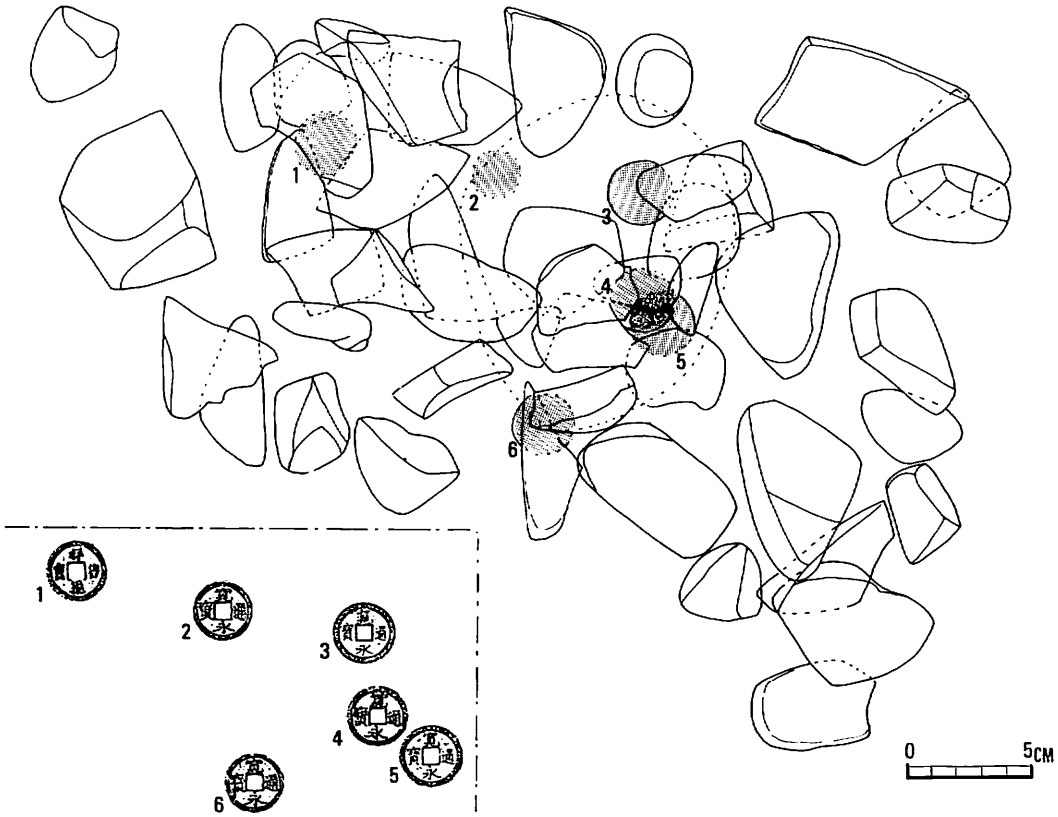
新山群の塚

1号・2号塚は直径3.0m、高さ0.6mとほぼ等しく小規模で南北に並列している。1号塚が下位にあるため、2号塚の方が背高く見える。2号塚上には五輪塔の頭部（空・風部）が置かれていたが、他の部分は見当たらない。五輪塔は室町時代末頃と考えられる。

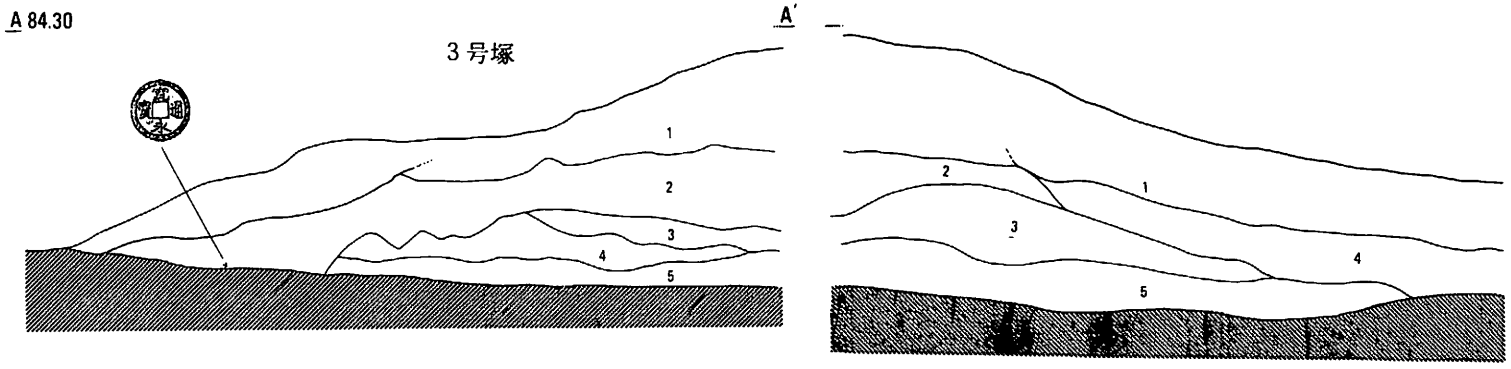
3・4・5号塚は、1・2号塚と旧道を挟んだ対岸に位置し、東西方向に並列している。直径、高さとも中規模であり、群の主体を占めている。発掘によって多少の遺物が出土したが、塚に伴う遺物は少く、ほとんどは縄文土器、石器等の混在遺物であった。

3号塚は、直径4.4m×4.1、高さ0.9mを測る。南側を旧道によって多少削平されている。土層は、5層に分けられ、中心部より漸次積み上げられている。遺物は寛永通宝が基底部より1枚、塚上より1枚採取された。

4号塚は、3号・4号5塚に挟まれ、直径4.6×4.1、高さ0.9mを測る。土層は、6層に分かれ、漸次積み上げられている。墳頂には細かく割れた凝灰質砂岩の台石断片があり、塚土に何らかの造立物が存在していたようだ。



第4図　新山5号塚下層集石

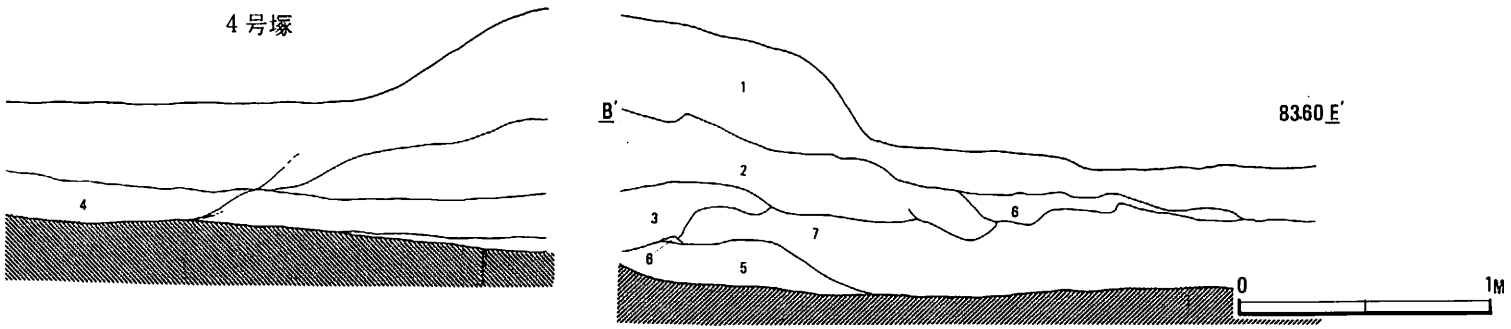


A"−A'土層説明

1 フショク土（表土）茶褐色土　軟質　パサパサ
2 茶褐色土　細粒　よくしまる
3 黒褐色土　炭化物を多く含む　構築面
4 茶褐色土　黄褐色土をまだら状に含む
5 黄褐色土　ソフトローム

B'−E'土層説明

1 フショク土　茶褐色土
2 黄茶褐色土　砂質
3 黒茶褐色土　黒色土のブロックをまばらに含む
4 茶褐色土　黒色土粒子を多く含む
5 暗茶褐色土　黒色土粒子とローム粒子をまばらに含む
6 黄褐色土　ブロック
7 黄褐色土　軟質　細粒



第5図　新山3号、4号塚土層図（1／30）

5号塚は、直径5.7×5.4、高さ1.2mを測る。土層は、8層に分けられ、中心付近より漸次積み上げられている。この塚は頂上に延宝8年銘（１６８０）を持つ庚申塔が造立されており、盛土中に埋もれていたが台石も伴っていた。塚上から寛永通宝4枚の他、現行の十円硬貨2枚が採取されている。基底部中心に3～5㎝大の円礫を敷きつめた集石と混在して寛永通宝等6枚が検出された（図上では5枚、他の1枚の出土位置がはっきりしないが、集石の上面中央付近と思われる）集石の中には黒色土の薄層があった他、焼土、炭等はなかった。また集石はいずれも河原石で、墨書等はなく、加熱を受けた様子もなかった。（新井）

5号塚土の庚申塔

庚申塔は林道沿いに東を向いて造立され、登り来ると、庚申塔が見える。石質は凝灰質砂岩でやや硬質である。高さ100.4㎝、上幅41.6㎝、下幅42㎝、上厚21.6㎝、下厚30.4㎝を測る。頭部山形の裾から下位にかけて後方が広がる。山形の長さは20㎝、角度は96度である。

形状は、表面板碑型で側面は舟底形をしている。ほぼ平面、丁寧に平滑に仕上げる。裏面は、形割、荒削りの仕上げで、中央を荒く平坦にしたまま、山形に向けて稜をもたせ、左右に削り分けている。正面肩部へかけても同様に稜をもたせ荒く削上げている。底部は同様に荒削であるがほぼ平面に成形する　従って一般にいう裏面が丸みを持った舟底形をしていない。

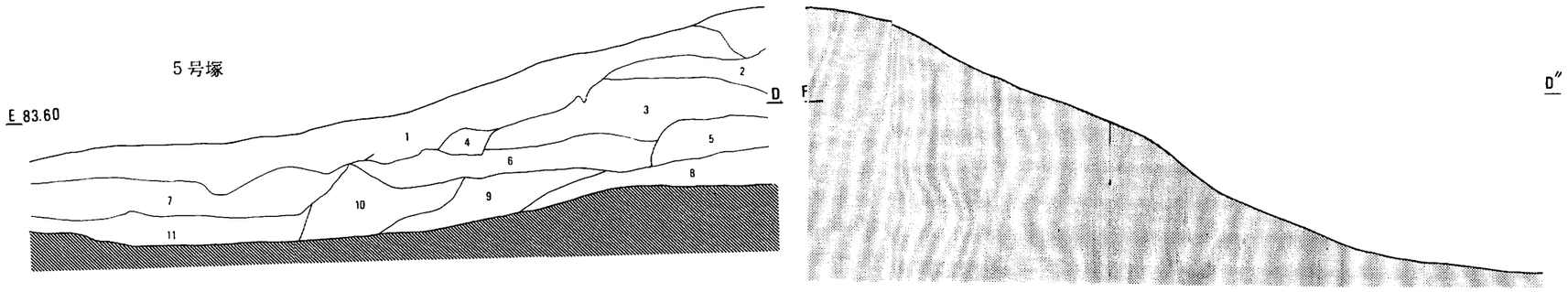
正面の意匠を見ると、山形の裾に右－日輪・左－月輪を配する。月は輪中に三日月を表現している。また両者に瑞雲を付し、雲の先端を鋭く長く輪上に伸ばすと伴に、表面凹凸を加え、雲勢を表している。この瑞雲の下位に水平の線を入れ、段をつける。この水平線の中央（正面中央）に上位を合わせ、主文を楷書で彫り込む、銘文は「奉待庚申後生善所」と8文字である。右の瑞雲下位から、紀年日を「干時延宝八庚申天二月吉日」と12文字を彫り込む。左の瑞雲下位からは、国郡名等を「武刀男衾郡小江川村施主□敬白」と14～15文字彫り込んでいる。

三猿は32.8×20.8㎝の方形の龕に彫り込んでいる。猿は同一の台上に正面を向って位置し、手足指等の容姿を良く表現している。右から、見猿、聞猿、言猿と並ぶ。多少の欠損風化が認められるが全体を半身浮彫にしているわりには良く遺存している。

二鶏は、上方の凹んだ長楕円形の枠内に陽刻される。右枠は、18×10㎝、雄が配置される。嘴は長く、とさかを持ち、尾は枠いっぱいに広がる。足は1本のようである。左枠は16.8×10㎝、雌が配置される。雄よりひとまわり小さく、尾も細く小さい。足は2本表現されている。二鶏は互いに向い合っている。

二鶏の下位から、底部までのわずかな間に8人の施主の氏名が刻まれている。右から「野本七之助　田中喜知平次　□□□兵衛　小林□左衛門　西木弥□左衛門　木村□左衛門　栗田□□　□□□兵衛」と彫り込まれているが、かなり磨滅がひどく判読が難しいため誤読があるかもしれない。全体的に保存状態は良好で、形態、意匠とも優品であろう。

台石は庚申塔身部と伴に所在しており、身部に対応するものであろう。石質は灰色の砂岩系の岩で、4号塚上の台石とは異なる。上面形は隅丸の長方形で、長側面が弧状に膨らみを持っている。



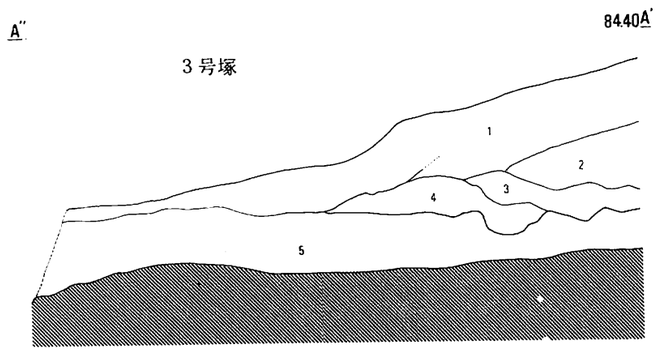
E−D土層説明

1　明褐色土（表土）

2　黒褐色土

3　褐色土に黒褐色土がまじる

4　黄褐色土（褐色土が少量まじる）



0　1M

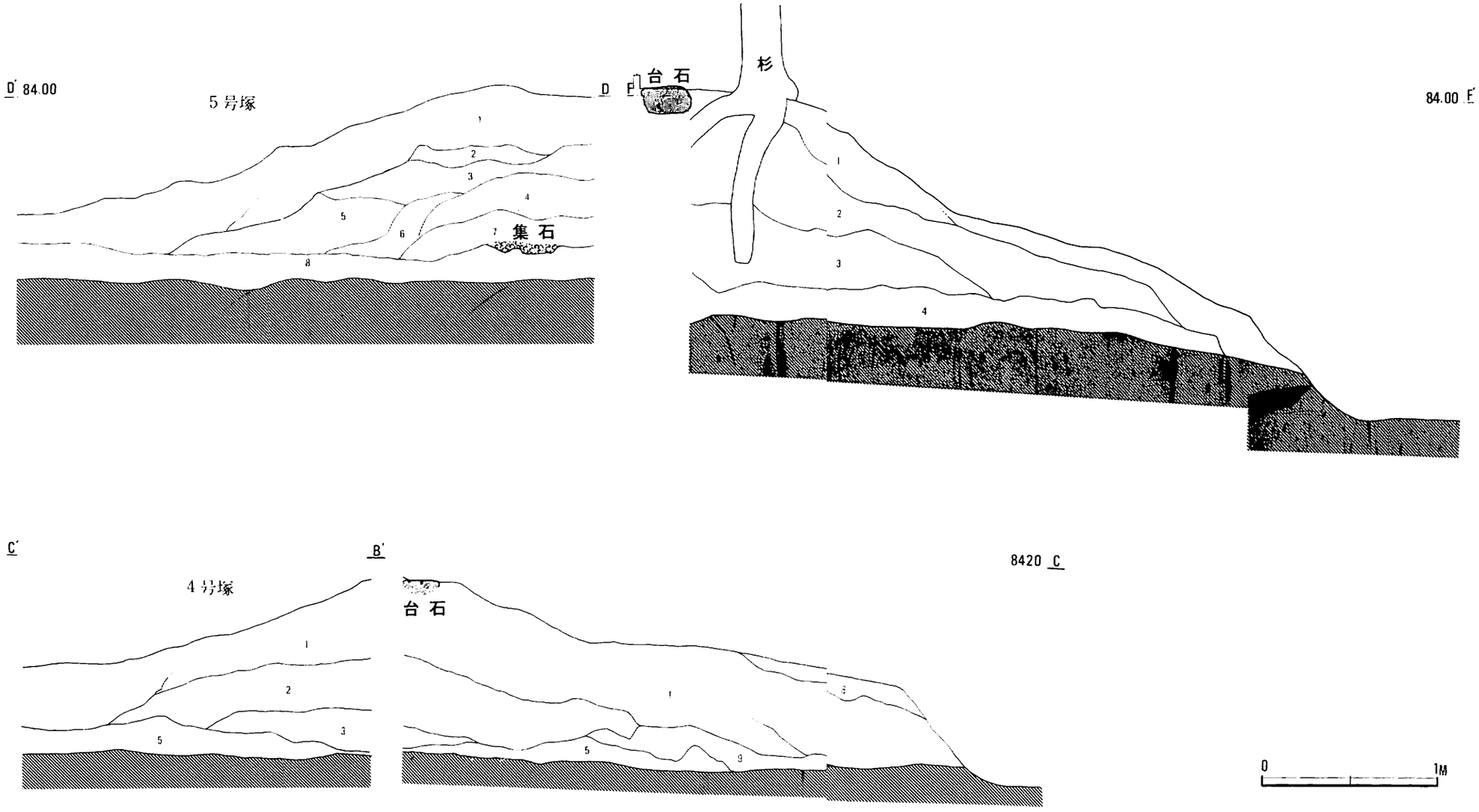
A−A’土層説明

1　茶褐色土　軟質　パサパサ　砂質

2　暗茶褐色土　黒色土をまばらに含む

3　黒褐色土　黒色土、ローム塊をまばらに含む

第6図　新山3号、5号塚土層図



第7図　新山4号、5号塚土層図（1／30）

C'−B'−C土層説明（第4号墳）

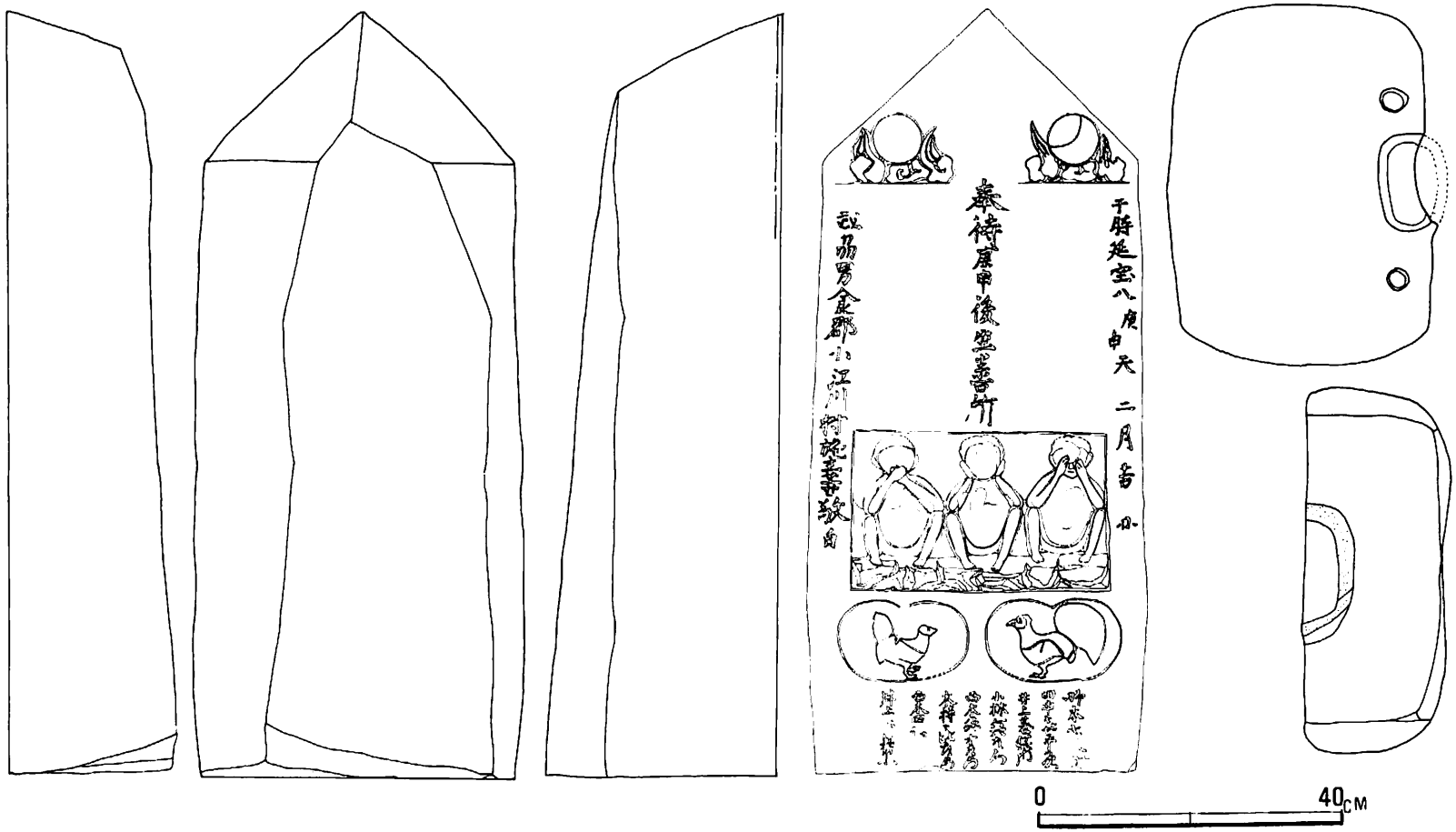
5　黄褐色土で黒色土粒子を含む　やや汚ローム
8　黒茶褐色土　砂質　フショク土
9　黄褐色土　軟質ローム

D'−D土層説明

1　茶褐色土　柔らかい細粒
2　（硬質）黒褐色土をブロック状に含む茶褐色土
3　茶褐色土　　黒褐色土を少量含む
4　黄茶褐色土　硬くしまる　細粒
5　茶褐色土　　ロームと黒色土を少量含む
6　暗茶褐色土　ロームと黒色土を微量含む
7　黄茶褐色土　4層にくらべてやや硬い
　2～3cm大の偏平な楕円礫が多い
　ほぼ水平に集中している。
8　茶褐色土（ロームを多く含む）
　2～7までが5号墳の構築土と思われる

F−F'土層説明（第5号墳）

1　フショク土
2　茶褐色土　砂質ローム粒子を多く含む
3　暗茶褐色土　黒色土をまだら状に含む
4　黄茶褐色土　軟質ローム（塚の構築面）



第8図　新山5号塚上庚申塔(1/8)

当地方に多く見かける江戸時代の墓石や石仏の台石と変わらないようである。長さ47.2cm、幅36cm、厚さは中心で19.2cm、周縁で18cmを測る。前面には水差状の彫り込み孔が3つあり、中央は楕円形で12.8×4.8cmを測り、台石より膨らんでいる部分は欠損している。深さは4.4cmある。水差の左右にはそれぞれ円い香立が彫られており、右の香立孔は直径3.2cm、深さ3.6cmを測る。左の花立孔は直径2.8cm、深さ3.4cmを測る。水差孔が右へ片寄っているため間隔は等しくない。台石の上面、身部をのせるため平面に成形されているが、周囲は形割、荒刻のままである。（新島）

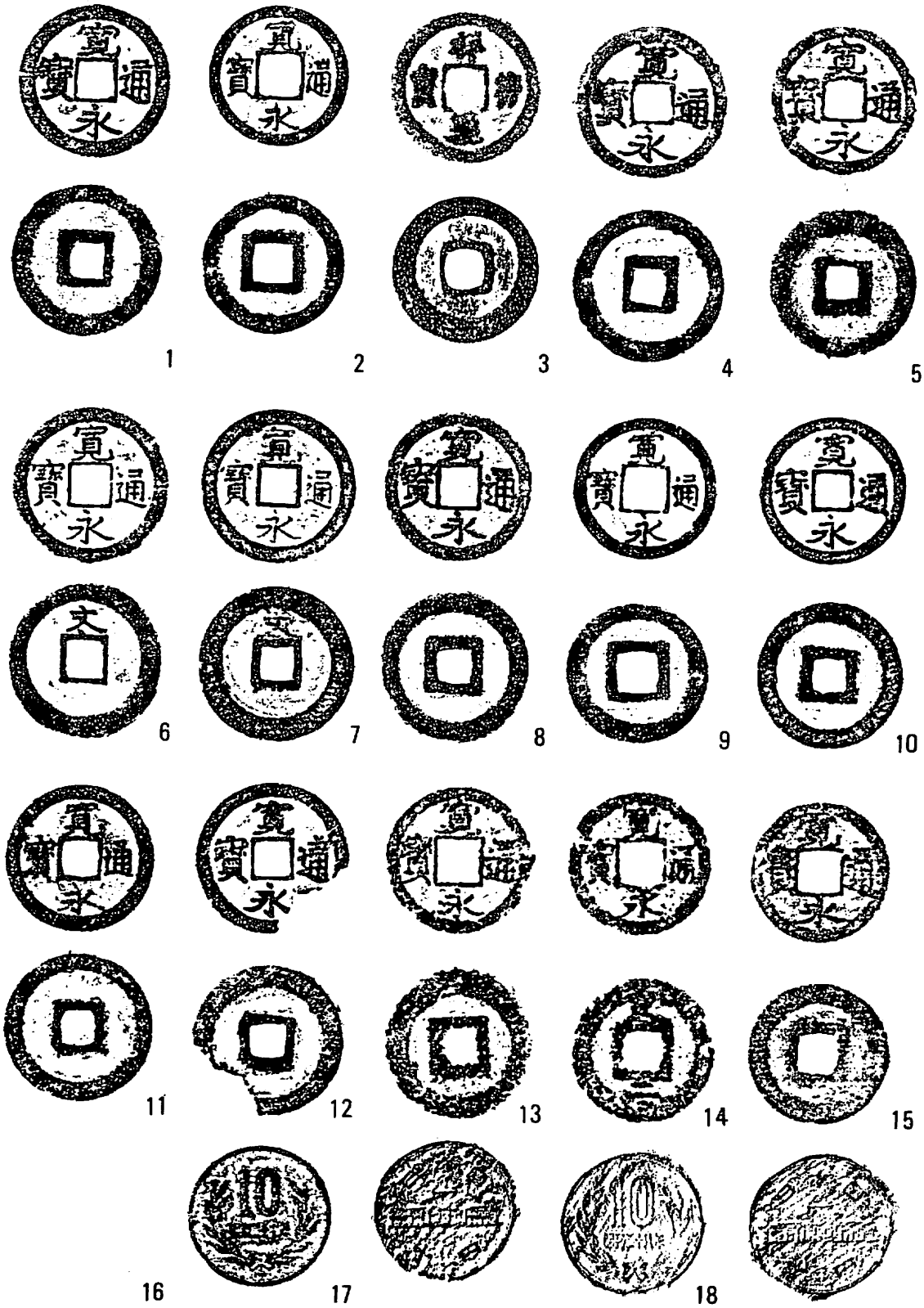
新山遺跡出土の古銭

5号墳の集石中より出土した6枚の銭はすべて鋳銅銭で、質・鋳上とも良好である。祥符通宝1枚の他は、みな寛永通宝だが、これは銭貨の種類ではなく枚数が意識されていたためであろう。六道銭の可能性が強いだろう。3号塚の寛永通宝は1枚のみで、5号塚の例とは性格が異なっていたようである。

墳丘上層からは江戸時代中〜後期以降流通を始める鋳鉄銭の寛永通宝が多く採取されている。背面に鋳造地の常陸国久慈地方を略記した「久二」の文字が読める例もある。最新の銭貨は現行の十円硬化が2枚ある。このことは庚申塔・塚にかかわる奉祀が塚を築いて以来、続けられてきたことが窺える。（新井）

第1表　新山遺跡出土古銭観察表

番号	銭貨名	通の変化	背文	直径	方穿	材質	状況	出土位置	備考
1	寛永通宝			2.5	0.6	銅	錆、小穴アリ	3号墳下No.1	
2	〃			2.3	0.7	銅		3号墳頂	
3	祥符通宝			2.4	0.7	銅	折れ曲がっている	5号墳下No.6	集石中
4	寛永通宝			2.45	0.6	銅	錆・小穴アリ	5号墳下No.2	〃
5	〃			2.4	0.6	銅	錆、周縁剝落	5号墳下No.1	〃
6	〃		文	2.5	0.65	銅	錆、小穴アリ	5号墳下No.3	〃
7	〃		文	2.5	0.6	銅	錆、周縁剝落	5号墳下No.4	〃
8	〃			2.4	0.65	銅	錆、周縁剝落	5号墳下No.5	〃
9	〃			2.3	0.7	銅	良好	5号墳上	第1層中
10	〃			2.3	0.55	銅		5号墳上	〃
11	〃			2.35	0.6	銅	錆、表面、荒	5号墳上	〃
12	〃			2.4	0.6	銅	錆、小穴アリ 右下方欠失	5号墳上	〃
13	〃			2.4	0.7	鉄	錆（茶褐色）	5号墳頂	
14	〃		久二	2.3	0.7	鉄	錆（茶褐色）	5号墳頂	
15	〃			2.3	0.7	鉄	錆（茶褐色）	5号墳頂	
16	〃			2.4	0.5	鉄	錆、顕著、文字不明.（茶褐色）	5号墳頂	錆がひどく拓本不能
17	十円硬貨			2.3			錆、文字不明瞭	5号墳頂	S27年銘
18	十円硬貨			2.3			錆、文字不明瞭	5号墳頂	S28年銘



第9図　新山遺跡出土古銭（1：1）

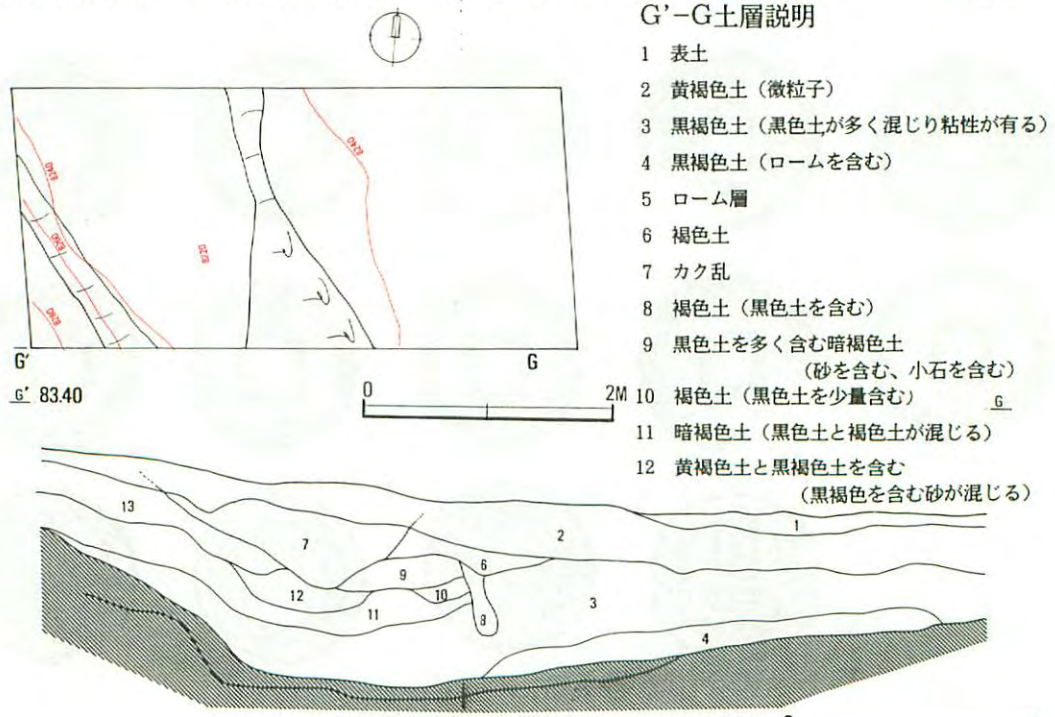
第2節　第6号墳

地膨れ状の墳丘を持つが、外見では古墳とするほど明瞭でない。直径12m、高さ1.2mを測る。墳丘の北側は盗掘の跡らしい削平部分がある。1～5号塚とは、規模・形態の異なる点から塚よりは、小規模低墳丘の古墳の可能性が考えられた。本墳は現状保存されるため部分的に4本のトレンチを設定するに止めた。その結果、周溝は良好に存在し、推定12m×11.5mで全周すると考えられる。各トレンチの規模はGトレンチ、幅2.1m、深さ0.25m、Hトレンチー幅2.5m深さ0.5m、Jトレンチー幅2.3m、深さ0.4mを測る。（第10、11、12図）

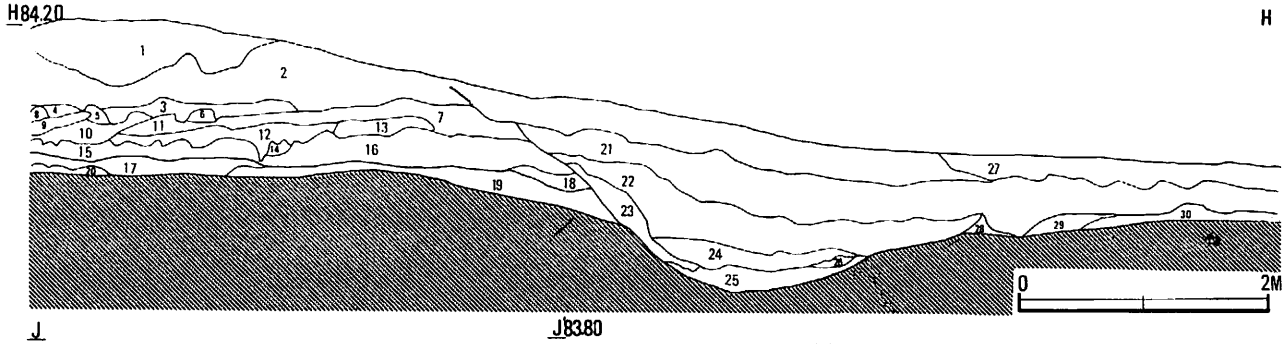
東側のGトレンチは斜面下位にあるためか深くない。また底面は平であった。Iトレンチは西南コーナ部分に当る。平面形は隅丸を呈し、底面は丸味を持つ。掘方は中央部分が深く、コーナー部分が浅いブリッジ状をしている。Hトレンチは墳丘の構築状況が明瞭に観察され、3～5号塚とは異なり、薄層だが順次、盛土されている。旧地表面より1.2mの盛土が残っていた。このトレンチでは主体部等の構造・施設は検出されなかった。

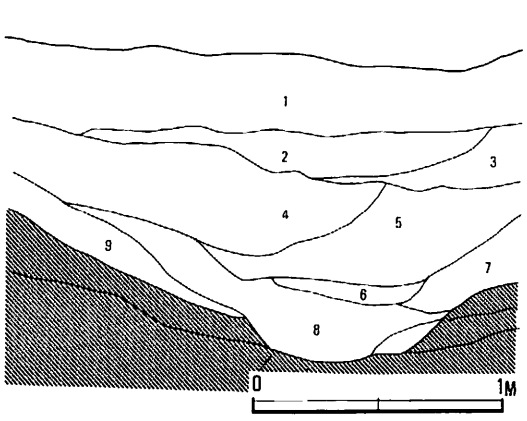
各トレンチからは縄文土器・石器等が出土した。他は周溝フク土中から、土師器甕、坩、台付甕等の破片が少量検出された以外、本墳の時期を知る資料は無い。

ボーリング棒による探査では、周溝が全周するらしいことの他、主体部を知る直接の資料を得ることができなかったが、古墳時代前期に築造された小型の方形墳である可能性が強い。云い方を変えれば、丘陵上に築かれた終末期の方形周溝墓として良いだろう。　（新井）



第10図　新山第6号墳トレンチ、土層図　0　1M





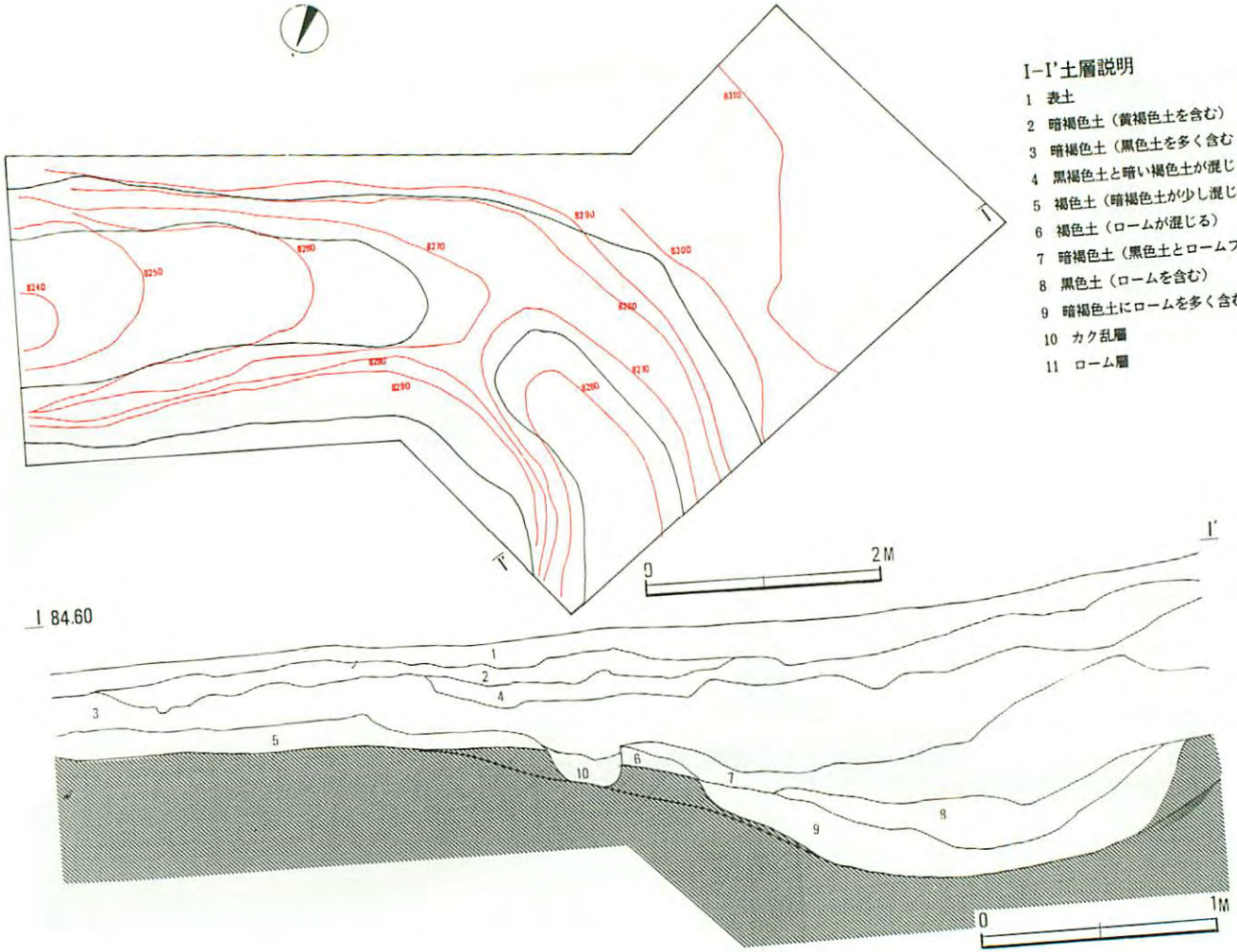
H−H'土層説明

1 黄茶褐色土　パサパサ　やや暗　カク乱
2 黄茶褐色土　パサパサ　ローム粒子多
3 暗茶褐色土　黒色土粒子塊を多く含む
4 茶褐色土　ロームを斑状に含む
5 硬質ロームのブロック
6 硬質ロームのブロック
7 暗茶褐色土　黒色土粒子を多く含む
　軟質砂質
8 ローム粒子　黒褐色土を斑状に含む
9 黒色土小塊を多く含む茶黒色土
10 硬質ロームのブロックと黒色土塊の混合した暗茶褐色土
11 黒色土小塊を多く含む茶黒色土
12 黄茶褐色土
13 暗茶褐色土　ローム塊を含む砂質土
14 ローム粒子を多く含む茶黒色土
15 ローム粒子を多く含む茶黒色土
16 黒茶褐色土　ローム粒子を多く含む硬質土
17 黄黒色土　硬質（旧地表）
18 ローム粒子を多量に含む黒茶褐色土
19 軟質のローム　黄茶褐色土
20 軟質ローム
21 黒茶褐色土　黒色土小塊を多数含む
　砂質やや硬くしまる
22 暗茶褐色土　ローム粒子小塊を多く含む
23 暗茶褐色土　ローム粒子　黒色粒子を多数含む細粒土
24 濃黒色土で砂質軟質細粒
25 暗茶褐色土　黒色土粒子及びローム粒子を多く含む
26 茶褐色土で黒色粒子を少量含む
27 茶褐色土　表土及びフショク土
28 黄茶褐色土　ローム粒子を多く含む
29 黄茶褐色土　ローム粒子を多く含む
　黒色土がやや多い
30 黄茶褐色土　軟質ローム

J−J'土層説明

1 黄茶褐色土　フショク土を含む表土
2 暗茶褐色土　軟らかく黒色土粒子を多く含む
3 黄褐色土　ローム粒子を多く含む
4 黒茶褐色土　ローム粒子及びローム小塊を多く含む
5 暗茶褐色土　硬くしまるローム粒子を多く含む
6 暗茶褐色土　黒色土を多量に含む　やや軟質
7 黒褐色土　細粒で硬くしまりローム粒子をまばらに含む
8 黒褐色土　細粒で酸化物粒子、ロームを多量に含む
9 暗茶褐色土　ローム土を斑状に含む
10 暗茶褐色土　砂質で黒色土粒子を少量含む

第11図　新山第6号墳土層図



第12図　新山第6号墳トレンチ・土層図

第３節　一括出土の遺物

縄文土器　（第13、14、15図）

総数182片を数える。すべて破片で復元できるものは無い。また縄文時代の遺構に伴う検出ではなく、フク土、盛土中からであった。早期撚糸文系土器（第15図1）を除くと前期から中期までの土器が主体を占め、加曽利Ｅ式土器が中心であった。

注意を引く遺物は第15図２～５がある。２は、器表面の剥離により、粘土接合面に加えたキザミ目を見ることができる。３は内面に付着する炭化物が、土器の亀裂に浸透している様子を観察できた。４は土器片利用の円盤と考えられる。側縁は細かな打ち割である。５は土隅の脚部の可能性がある。

６号墳出土土師器（第14図）

総数14点、すべて周溝から出土している。２、６は坩型土器の口縁部及び肩部の破片であり、２トレンチより出土、１、３～７は、ハケ目の施されたカメ型土器の胴部破片である。８は、おそらく壺型土器の底部になると思われる。底部のみ完存する。９、10、11は台付甕型土器の脚部破片である。10だけが完存している。ハケ目は荒く、つくりはやや粗雑である。これは2トレンチ底面より浮いた状態で出土している。12は２トレンチ上面で出土した。口縁部と底部の破片は接合しないが同一個体であろう。胴部の破片は出土していないので図上での復元である。口縁はやや外反気味に開き、端部は丸味を持つ、体部は球状になり底部も丸味を持つ、器面は体部以下底部までヘラケズリを施している。

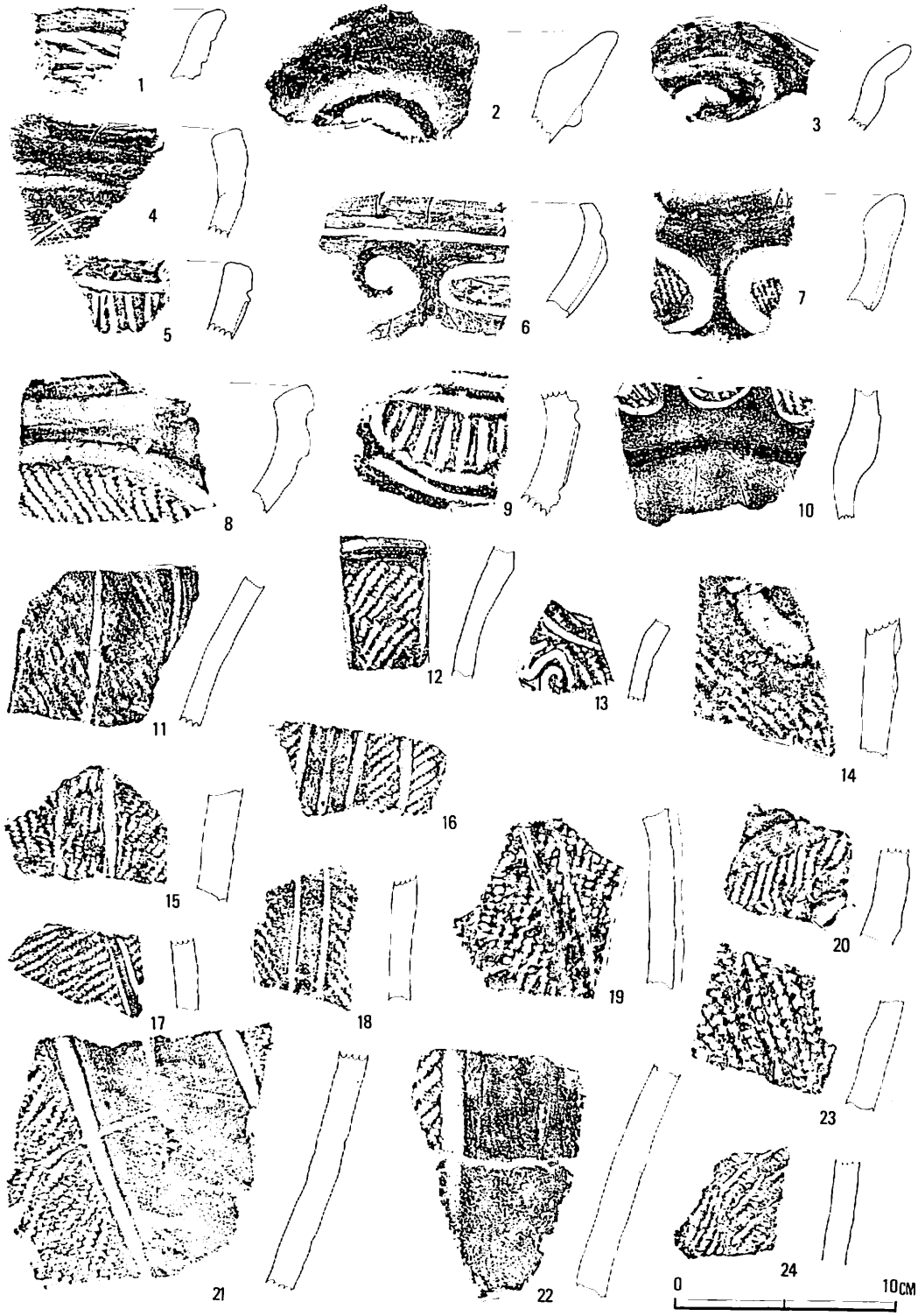
石製品　（第16、17、18、19、20、21図）

石器は縄文土器と同様にフク土や盛土中から多く出土している。３～５号塚上には特に集中しており、かつて耕作時に出土した遺物を集積したものだろう。総点数は127点であった。この内訳は、礫器21、打製石斧36、大型剥片17、小剥片７、磨石26、石核２、焼礫、砥石1であった。縄文早期、中期に帰属する石器が中心である。

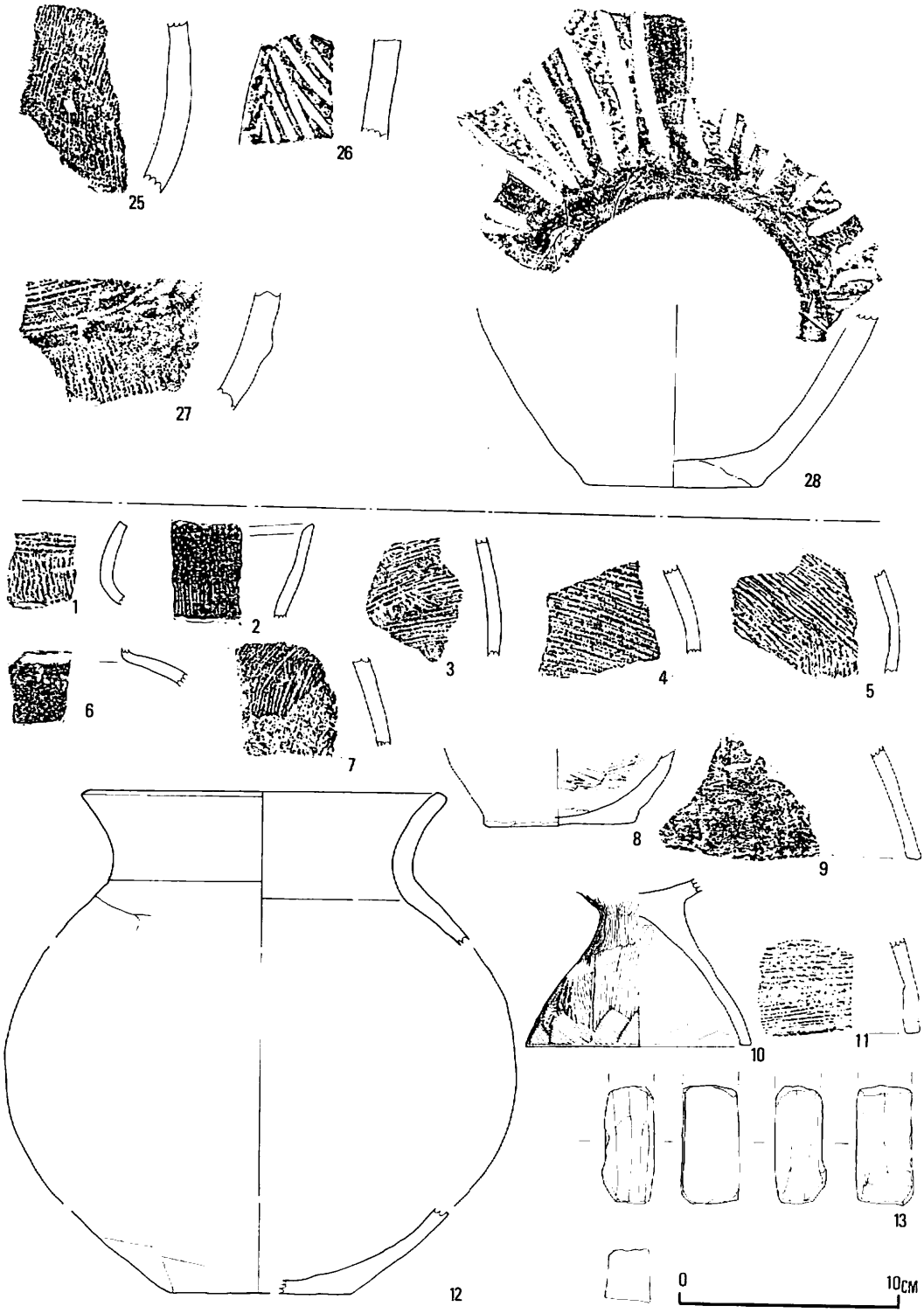
礫器は15点図示した。1、2、4、5は楕円礫の一側面約1／3を大きく剥離し、刃部としている。12以外は背面は自然面のまま残している。6、7、10はほぼ全側面に調整が加えられ、自然面の割合が少ない。8、9、11は長楕円を呈し、長軸に直交する側縁を調整している。13、15は片面のみに自然面を残している。16、17は石核であろう。19はナイフ形をしている。

打斧20は分銅形をしている。21～25、28、29、32、33、36は撥形をしている。部分的に自然面を残す例が多くまた一部欠損するものがある。28は刃部の磨滅が見られる。30、31、34～35、37～43は短冊型の部類に属す。38以外は自然面を除去し切っていない。39～43は半欠品で、使用状態で折れたかのようだ。26は欠損品で平面部が研摩されている。砥石とした。

礫器は縄文早期に属すのが一般的で、本遺跡でも撚糸文系土器が一片出土しているので早期として良いだろう。打斧を中心とする打製石斧は、本遺跡の主体を占める中期加曽利Ｅ式土器に伴う石器である。他に中期と考えられる磨石が12点出土している。　（新井）



第13図　新山遺跡出土縄文土器（1／3）



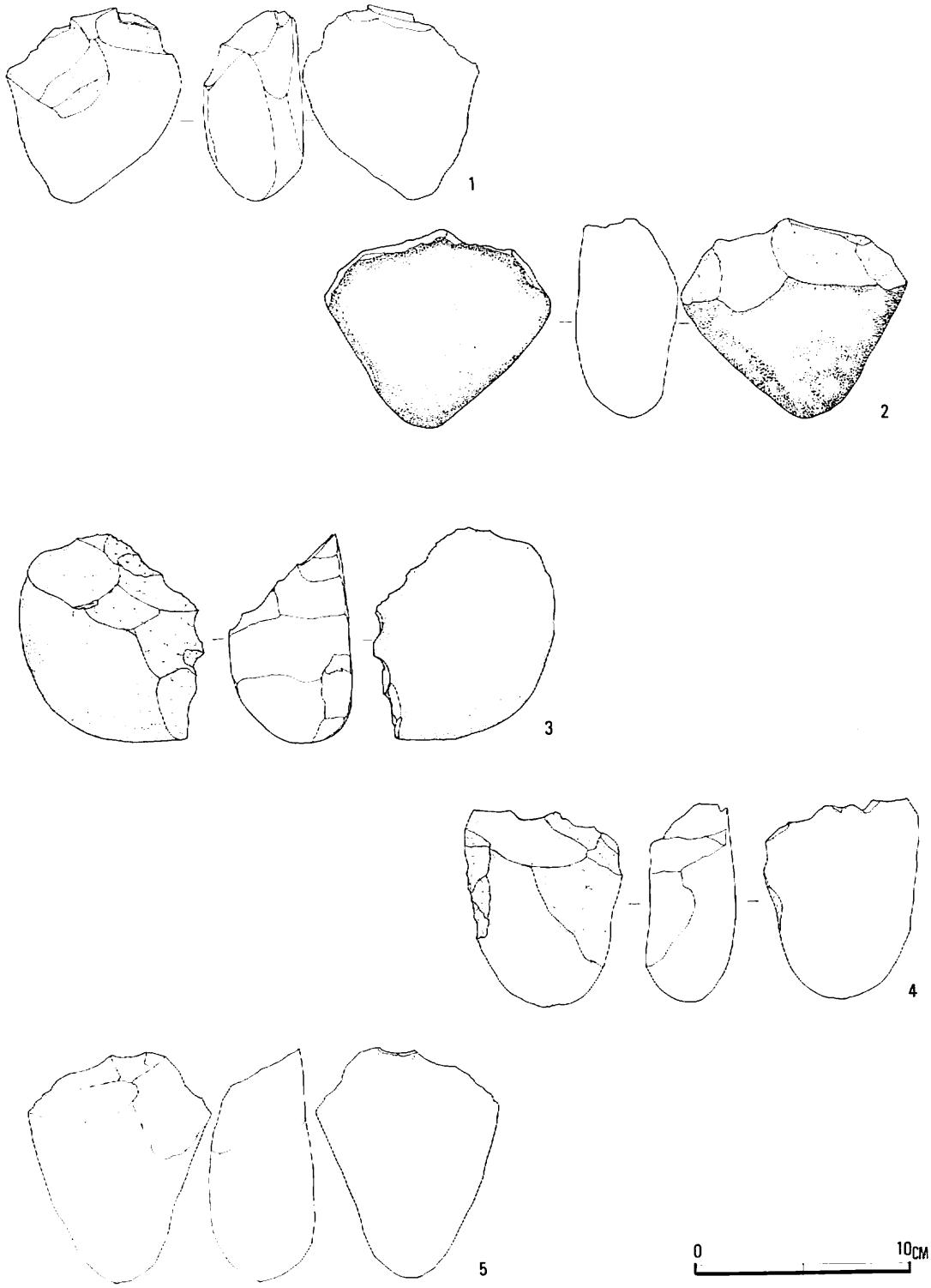
第14図　新山遺跡出土遺物・新山第6号墳出土遺物（1／3）

第15図　新山遺跡出土遺物（1／15）

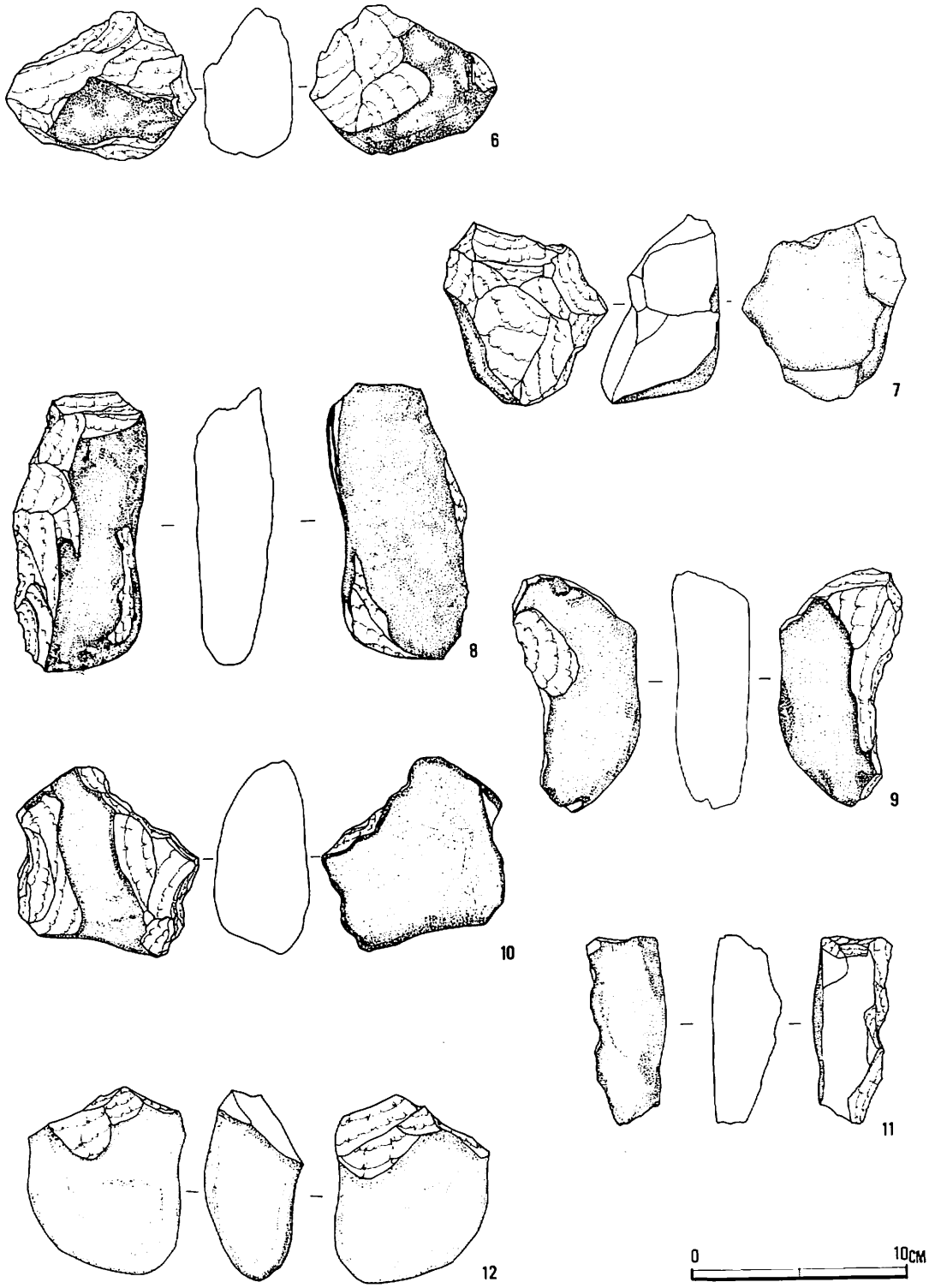
第2表　新山遺跡出土　土器観察表

登録No. 図　版	出土地点	層位	器種	部　位	文　様　表　現	地文	内面調整，胎土	色　　調	備　　考
13−1	6 号 墳	2	カメ	口　縁	ヘラ→凹線		横位ヘラナデ、細砂	内　黒褐色 中　灰色 外　灰色	
2	6 号 墳	2	カメ	口　縁	ナデ→隆帯		横位ヘラナデ，細砂、長石	内　黄褐色 中　黒色 外　赤褐色	
3	5 号 墳	2		口　縁	ナデ→隆帯		横位ヘラナデ，細砂、長石	内　黒褐色 中　黒色 外　黒褐色	
4	5 号 墳	1		口　縁	ナデ→沈線		横位ナデ、少砂長石多	内　黒茶褐色 中　黒灰色 外　灰褐色	粗製土器？
5	6 号 墳	2		口　縁	ナデ→凹線，縦→横位		横位ナデ，小石長石、細砂多	内　茶褐色 中　黒茶褐色 外　黒色	
6	6 号 墳	2		口　縁	粘土隆起帯，ＲＬ、充塡		横位ヘラナデ，細少	内　黒茶褐色 中　褐色 外　黒茶褐色	
7	調査区内	2		口　縁	隆帯，RL、充塡		横位ナデ，小石細砂，赤褐色粒小	内　黄褐色 中　灰黒色 外　黄褐色	
8	5 号 墳	2		口　縁	ヘラナデ→降帯，RL充塡		横位ナデ，細砂	内　灰褐色 中　灰黒色 外　茶褐色	
9	5 号 墳	2		口　辺	沈線，2本１組区画→，沈線充塡		横位ヘラナデ	内　黒色 中　灰黒色 外　茶褐色	
10	6 号 墳	2		頸　部	ヘラナデ→RL，縦		縦位ヘラナデ，細少、長石、少	内　灰褐色 中　灰色 外　灰褐色	
11	5 号 墳	2		体　部	RL・横位→沈線		横位ヘラナデ，細少、多	内　赤褐色 中　灰褐色 外　茶褐色	
12	6 号 墳	2			横位凹線，RL斜縄文，沈線		横位ヘラナデ，細少	内　茶褐色 中　茶褐色 外　黄褐色	
13	4 号 墳	3			RL、縄文，→沈線		横位ナデ，細砂	内　黒茶褐色 中　黒茶褐色 外　赤褐色	内面に炭化物付着
14	調査区内			体　部	RL斜縄文，降帯→凹線		荒れ	内　黄褐色 中　黄褐色 外　黄褐色	
15	5 号 墳			体　部	RL縄文，→垂下する沈線		横位ナデ，小石、石英長石多	内　赤褐色 中　灰褐色 外　黄褐色	
16	6 号 墳				RL斜縄文，沈線・磨消		荒れ，細砂、長石	内　茶褐色 中　灰褐色 外　赤褐色	内面タール状，炭化物付着
17	6 号 墳				RL斜縄文，横縦位沈線		横位ヘラナデ，細砂	内　茶褐色 中　灰色， 外　黄茶褐色	
18	5 号 墳			体　部	RL斜縄文，沈線→磨消		小砂・多	内　黄褐色 中　灰黒色 外　黄褐色	
19	調査区内				隆帯、RL，斜縄文		横位ナデ，小石、細少、長砂	内　黒茶褐色 中　黒色 外　黄褐色	
20	6 号 墳				隆帯縄文，ナデ		横位ナデ，細少、長石、多	内　黒褐色 中　黒色， 外　黒色	
21	6 号 墳			体　部	ケズリ→RL，斜縄文→沈線		横位ヘラナデ，細少砂小	内　黄褐色 中　灰色 外　黄褐色	

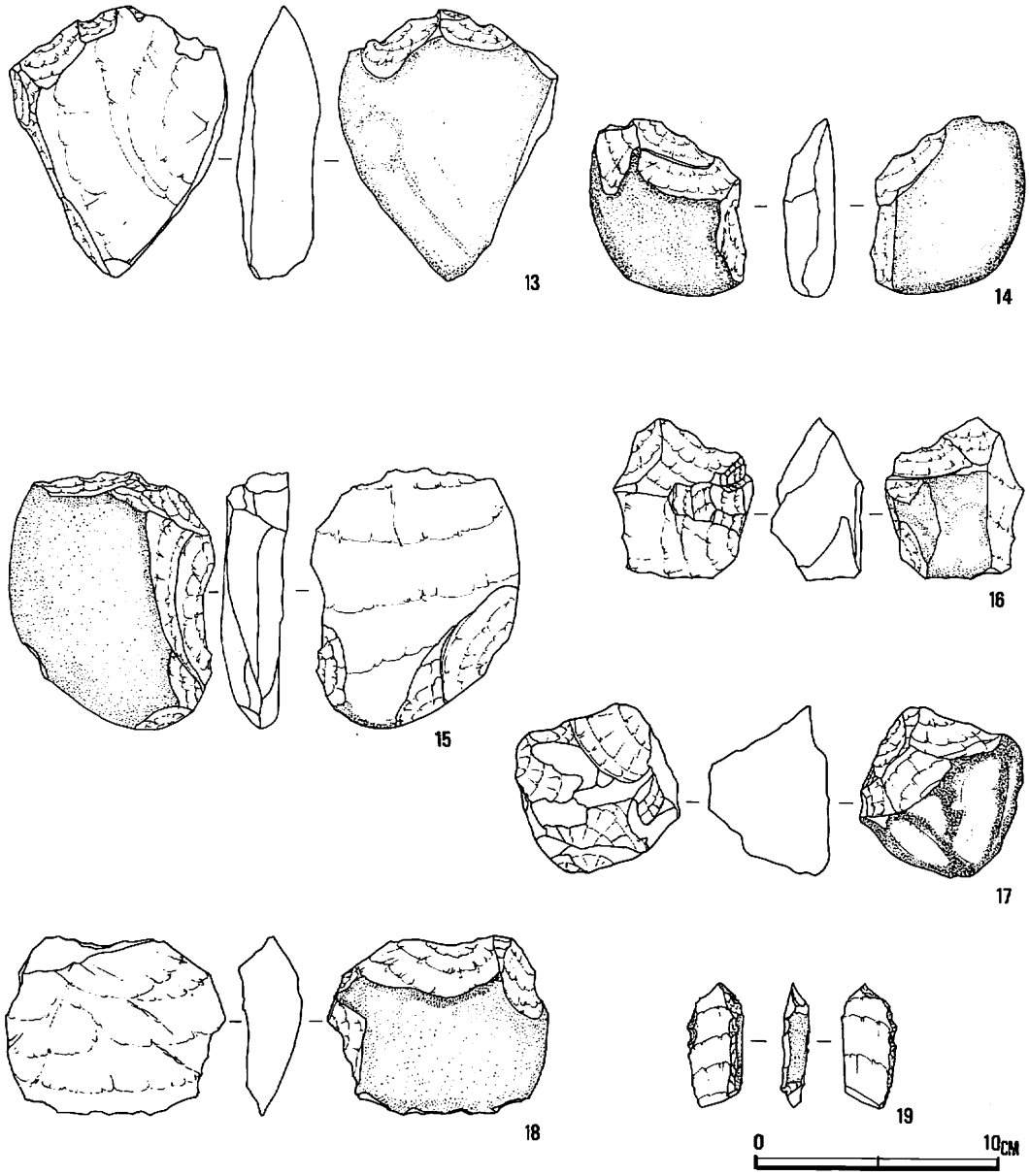
登録No. 図版	出土地点	層位	器種	部位	文様表現	地文	内面調整，胎土	色調	備考
22	6号墳	2		2片接合，体下半	RL、斜縄文，沈線、磨消		縦位ヘラナデ，細砂	内 黄褐色 中 灰黒色 外 黄褐色	
23	調査区内								22と接合
24	6号墳	2			縄文，R L,r		横位ナデ，細少	内 黒色 中 灰黒色 外 茶褐色	
25	6号墳	2			クシ		横位ヘラナデ，細砂、長石、多	内 灰褐色 中 黒色 外 黄褐色	
26	5号墳	2			斜位沈線		荒れ，細砂	内 灰茶褐色 中 黒色 外 黄茶褐色	
27	5号墳	3			隆帯、クシ，縦横位		横位ナデ，小石、石英、長石多	内 黒色， 中 灰黒色 外黒茶褐色	
28	調査区内			底部	ナデ→斜縄文，→沈線→磨消		横位ナデ，細砂、長石多	内灰褐色，中灰色，外黄褐色	内面に炭化質が付着している
14-1	6号墳 2T	下	カメ	口縁		ハケ	横ナデ	細砂 内 黒灰色 外黄茶褐色	
2	6号墳 1T	下	堆	口縁		ナデ	縦ヘラナデ	細砂 内・外 黄茶褐色	
3	6号墳 2T	中	カメ	体部		ハケ	横位ナデ	細砂 内・外 暗茶褐色	3、4、5は同一個体
4	6号墳	中	カメ	体部		ハケ	横位ナデ	細砂 内・外 灰茶褐色	
5	6号墳 2T	中	カメ	体部		ハケ	横位ナデ	細砂 内・外 暗茶褐色	
6	6号墳 2T	中	堆	体部		ナデ	横位ナデ	細砂 内・外 黄茶褐色	
7	6号墳 3T	中	カメ	体部		ハケ	横位ナデ	細砂 内・外 黄茶褐色	
8	6号墳 3T	中	ツボ	底部		ナデ	横位ナデ	細砂・小石 黄茶褐色	
9	6号墳 3T	中	台付カメ	脚台		ナデ	横位ナデ	小石・砂 黄茶褐色	
10	6号墳 2T	中	台付カメ	脚台		ハケ	横位ナデ	細砂 外灰褐色， 内茶褐色	
11	6号墳 1T	下	台付カメ	脚台		ハケ	横位ナデ	細砂 内外暗茶褐色	
12	6号墳 2T	上	カメ	口縁底部		ヘラケズリ	横位ナデ	細砂・小石 内・外 灰茶褐色	
15-1	6号墳 2T	中	カメ	口縁	撚糸文		横位ナデ	細砂 内外黄灰色 中灰色	
2	5号塚	2	カメ	体部	RL斜縄文		横位ナデ	細砂 内外黄茶褐色，中灰色	接合面，キザミ目
3	6号墳 3T	中	カメ	体部	沈線，L L,R		横位ナデ	内茶褐色， 中灰褐色， 外赤褐色	炭化物付着
4	調査区内		カメ	体部	同化・不明		横位ナデ	細砂 内外黄茶褐色，中灰色	円盤
5	5号塚	2		足？	ナデ		細砂	細砂 茶褐色	土偶？



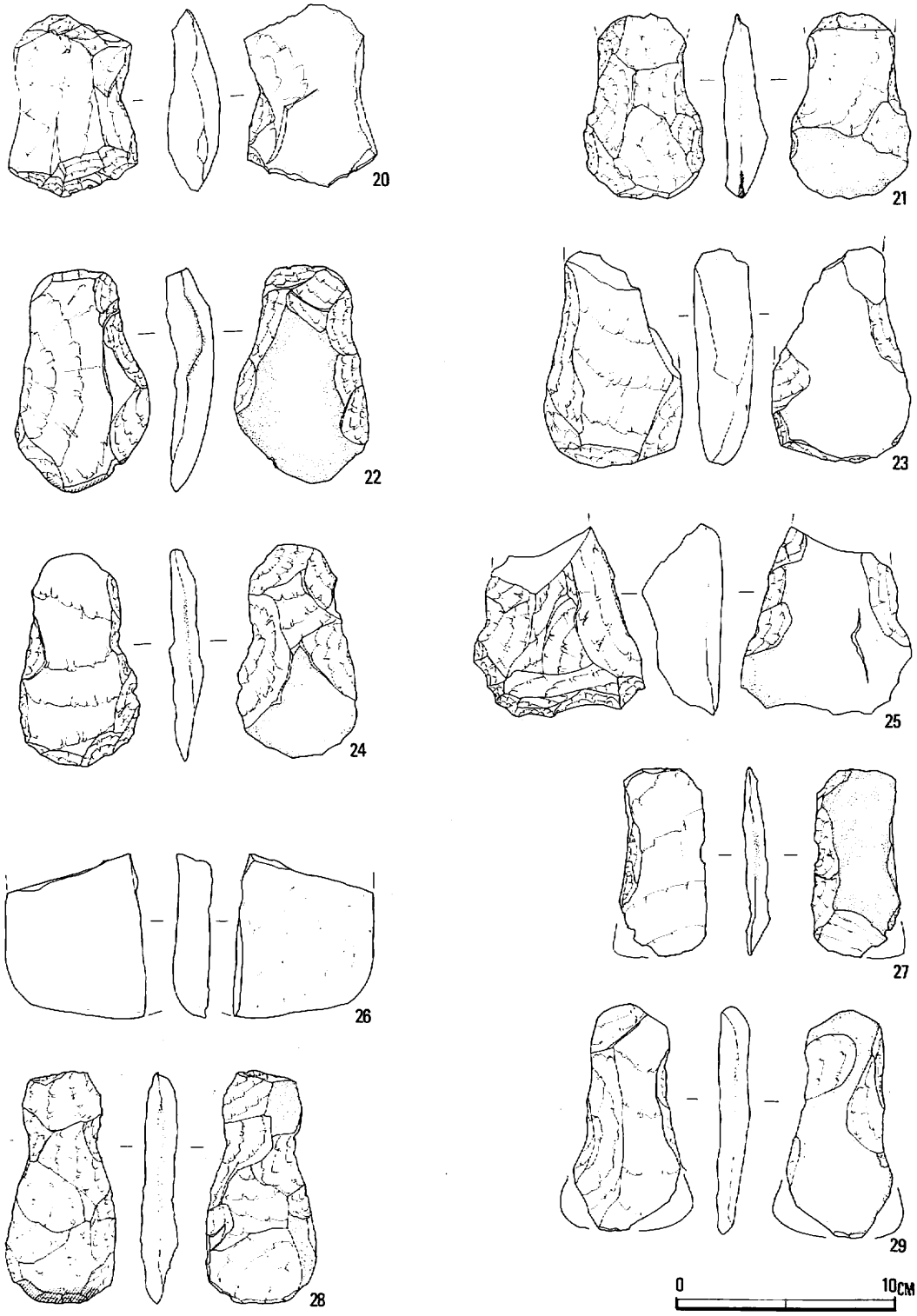
第16図　新山遺跡出土石器（1／3）



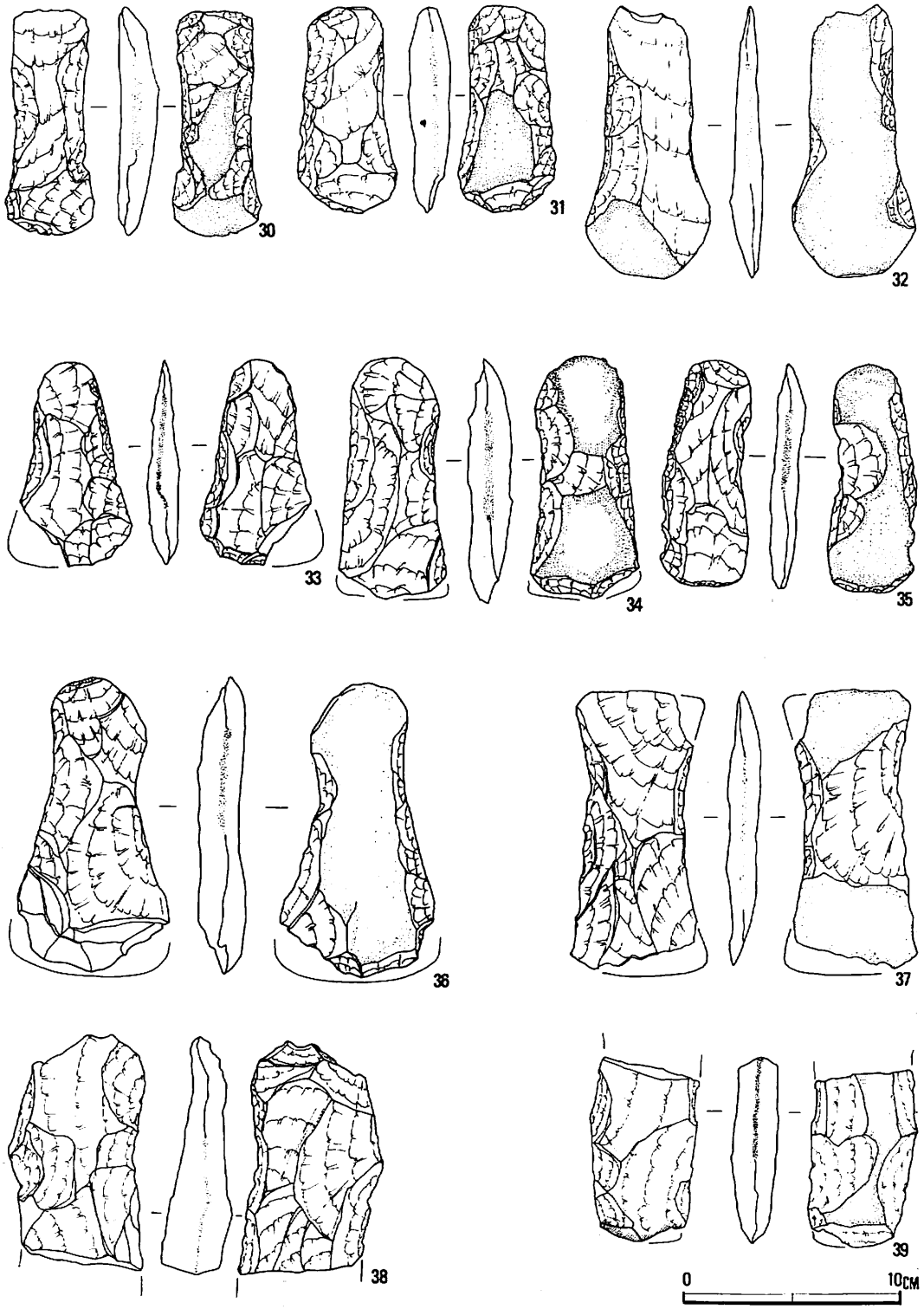
第17図　新山遺跡出土石器（1／3）



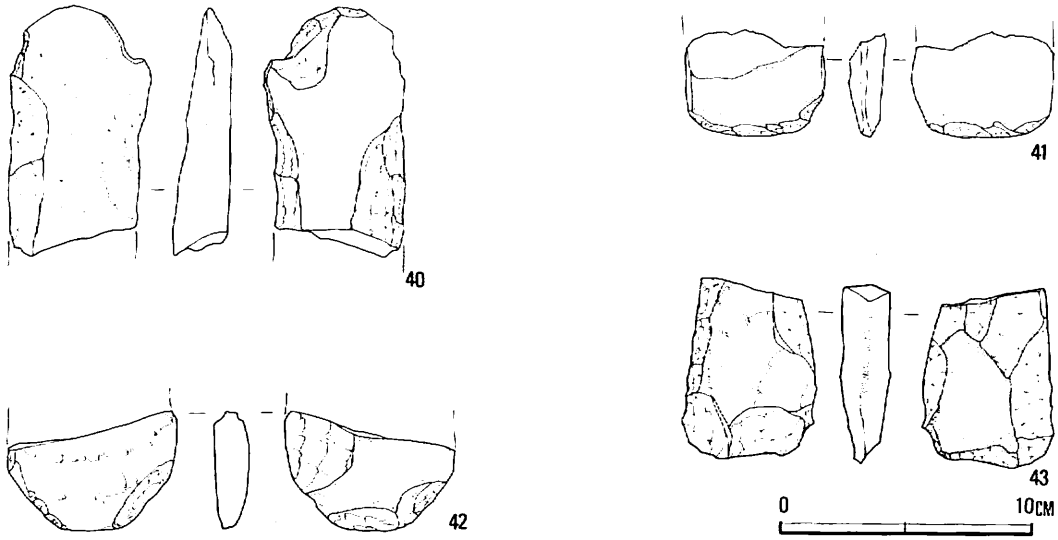
第18図　新山遺跡出土石器（1／3）



第19図　新山遺跡出土石器（1／3）



第20図　新山遺跡出土石器（1／3）



第21図　新山遺跡出土石器（1／3）

第3表　新山遺跡出土石器観察表

登録No. 図　版	出土地点	層位	器　種	長さcm	幅　cm	厚さcm	重量g	石　　材	備　　考
1	5 号 塚	1	礫　器	9. 1	8. 1	4. 5	370	頁　　岩	
2	5 号 塚	1	礫　器	9. 2	10. 2	4. 6	617	頁　　岩	
3	6号墳2T	頁岩	礫　器	8. 2	9. 2	5. 4	523	頁　　岩	
4	5 号 塚	2	礫　器	9. 2	7. 0	3. 9	340	頁　　岩	
5	5 号 塚	2	礫　器	10. 8	8. 5	4. 6	510	頁　　岩	
6	5 号 塚	2	礫　器	7. 0	8. 6	3. 8	250	頁　　岩	
7	5 号 塚	2	礫　器	8. 5	7. 5	4. 0	320	頁　　岩	
8	5 号 塚	2	礫　器	12. 7	5. 7	3. 6	410	頁　　岩	
9	5 号 塚	2	礫　器	11. 1	5. 2	3. 3	318	頁　　岩	
10	5 号 塚	2	礫　器	8. 9	8. 4	4. 1	365	頁　　岩	
11	5 号 塚	2	礫　器	8. 7	3. 4	2. 7	136	頁　　岩	
12	3 号 塚	2	礫　器	8. 9	6. 8	4. 5	360	頁　　岩	
13	4 号 塚	3	礫　器	11. 2	8. 9	2. 8	300	頁　　岩	
14	5 号 塚	2	礫　器	7. 2	6. 1	2. 1	133	頁　　岩	
15	5 号 塚	2	礫　器	10. 6	8. 3	2. 4	300	珪　　岩	
16	5 号 塚	2	礫　核	5. 4	6. 5	3. 6	120	頁　　岩	

登録No. 図版	出土地点	層位	器種	長さcm	幅 cm	厚さcm	重量g	石材	備考
17	5号塚	2	石核	7.1	6.8	4.8	240	頁岩	
18	5号塚	2	大型剥片	9.0	7.1	2.3	180	珪岩	
19	6号墳2T			5.2	2.1	0.9	10	チャート	
20	5号墳	2	打斧 分銅型	8.3	5.8	2.4	115	砂岩	
21	5号墳	2	打斧 分銅型	8.5	5.4	2.4	90	砂岩	欠損
22	3号墳	2	打斧	10.1	6.2	1.9	130	頁岩	
23	5号墳	2	打斧	(9.9)	6.3	2.6	175	頁岩	半欠
24	5号墳	2	打斧	9.8	5.5	1.2	85	頁岩	
25	5号墳1T		打斧	(9.6)	7.6	3.6	225	ホルンフェルス	半欠
26	5号墳	2		(7.5)	(6.3)	(1.5)	105	砂岩	半欠
27	3号墳	2	打斧 短冊型	8.5	4.0	0.8	43	砂岩	
28	5号墳	2	打斧	10.7	5.0	1.4	100	頁岩	
29	5号墳	2	打斧	10.5	4.8	1.3	75	頁岩	
30	5号墳1T		打斧 短冊型	10.4	4.1	1.6	90	頁岩	
31	5号墳		打斧 短冊型	9.5	4.4	1.8	90	頁岩	
32	6号墳3T		打斧	12.5	5.7	1.1	105	砂岩	
33	4号墳3T		打斧	9.5	(4.4)	1.1	65	砂岩	欠損
34	5号墳	2	打斧	11.0	(4.8)	1.9	125	砂岩	半欠
35	6号墳3T		打斧	10.4	3.9	1.1	61	頁岩	
36	5号墳1T	2	打斧	(13.6)	6.9	1.8	191	砂岩	半欠
37	5号墳7T	2	打斧	(12.8)	(5.4)	1.3	124	頁岩	半欠
38	5号墳1T	2	打斧	(10.8)	5.7	2.9	210	ホルンフェルス	半欠
39	5号墳	2	打斧	(8.5)	4.8	1.8	110	頁岩	半欠
40	5号墳	2	打斧	(9.8)	5.6	2.1	136	頁岩	半欠
41	5号墳1T		打斧	(4.3)	5.5	1.4	41	頁岩	半欠
42	6号墳1T		打斧	(4.7)	6.6	1.3	46	頁岩	半欠
43	5号墳	2	打斧	(7.2)	5.0	1.9	91	頁岩	半欠
13	5号塚	2	砥石					泥岩	

第Ⅳ章　発掘調査の整理と考察

第１節　新山遺跡の方形周溝墓について

方形周溝墓に盛土、墳丘の存在することが指摘されて久しい。本報告でも新山第6号墳を方形周溝墓として扱うが、以下本遺跡の特徴を掲げながら説明したい。

① 第６号墳は、現況が山林のためか保存状態が良く、明らかに墳丘が認められる。
　外見状1．0m、旧表土からも1．2mの盛土が確認された。

② 周溝が存在し、方形を呈しながら墳丘をとりまく。周溝の規模はＨトレンチで幅2．3m、深さ0．5mを測る。また周溝コーナー付近は浅く、中央付近は深くなっている。

③ 墳丘は方形を呈し、周溝によって区画される。推定される墳丘規模は12m×11．5mを測る。

④ 五領式の土器片を伴っている。築造期は古墳時代前期（五領期末）と考えられる。

⑤ 主体部は土拡墓、または木棺直葬と考えられる。

⑥ 第六号墳の周辺には、明瞭な墳丘を持つ古墳等は見当たらない。

上記①～⑥の特徴を掲げたが簡単に言えば丘陵土に立地する古墳時代前期の方形周溝墓とすることができる。

方形周溝墓は一般的な傾向として群集し、周溝を共有するなど被葬者集団の等質性が高く、きわめて結びつきの強い集団の墓、たとえば家長を中心とした家族の墓と考えられてきた。しかし五領期終末以降、方形周溝墓は単独で存在し、規模も大型の例が目につくようになり他の方形周溝墓と異なったあり方を見せる例がある。これらの集団より抜きん出た方形周溝墓は古墳的といっても良く、安光寺１号墓（文献１）などに代表される。また鷺山前方後方墳（文献２）を始めとして多くの前期古墳が築造されるが、なお方形周溝墓群が築造され、岡部町石蒔Ｂ遺跡（文献３）、美里町志戸川遺跡（文献４）のように前方後方形を伴った方形周溝墓群も知られる。

江南町塩古墳群第１支群は方形周溝的性格を残す古墳として再評価されている（文献５）。これらの前期古墳、方形周溝墓の被葬者に階層的な格差を早くから想定したのは、金井塚良一氏であり、両者の差異を農業共同体内での権力構造の強弱によるとしている。さらに本地域の方形周溝の基礎的な研究も同氏によってなされ、本文で触れようとする問題以外についても、すぐれた指摘がある。（文献６）　本文では最近の本地域周辺の調査例を踏まえ、方形周溝墓終末の様相を考えたい。

1　美里町塚本山古墳群では、丘陵上に９基の方形周溝墓が検出され、２号と14号の2基は50～65㎝の盛土を確認している。
　14号の土拡墓からは器台、台付甕等の他、鉄槍・鉄剣が出土している。（文献７）

2　美里町神明ヶ谷戸遺跡では丘陵上に8基の方形周溝墓が検出され、五領期終末とされる８号方形周溝墓は一辺18．6m、溝幅3．4m、盛土高1．5m以上の規模を有し主体部は４ヶ所確認され、玉類が出土しているという。
　また鬼高式の広口壺を出土した円形の周溝墓も検出されたという。（文献８）

3　本庄市下野堂古墳群は16基の方形周溝墓と１基の円形周溝墓が検出され、一辺が、22×21mを

測る大型例もあり、盛土も確認されている。10号方形周溝墓からは碧玉製石釧が出土している。和泉期と報告されているが五領期終末に位置づける見解もある。（文献9・15）

4　岡部町千光寺古墳群は尾根上に位置し3基の方形周溝墓が検出されている。4号方形周溝墓は一辺16．0m、溝幅4．2m、盛土高0．6mで、壺棺と滑石製臼玉を出土している。

五領期末～和泉期初頭と考えられている。（文献10）

5　岡部町安光寺1号墓は丘陵上に位置し、一辺13．3m、溝幅1．3m、盛土高0．7mの方台状で、コ字形に周溝が遺存している。

五領期終末～和泉期初頭と考えられている。

隣接して2号墳があり、粘土槨主体部が検出されている。1号墓に連続して築造され5世紀中葉以前とされている。文献1

6　熊谷市万吉下原遺跡は吉野川に臨む江南台地縁辺に位置し、3基の方形周溝墓が検出されている。方形の台部を周溝が円形に巡り、50～70cmの盛土を有しているという。（文献11・12）

7　東松山市番清水遺跡は市野川に臨む松山台地縁辺に位置する。五領期の住居群廃絶後方形周溝墓が1基築造された。一辺22．15m、溝幅2．5mで一部周溝は途切れる。五領期終末と報告され、調査当時から方形周溝墓の下限を考える上で注意されている。（文献6・13）

8　滑川町屋田遺跡、滑川の支流市野川に望む台地上に立地する。4号墳は和泉1期の低墳丘な小円墳で直径11．8m、溝幅2．2m盛土高約20cmを測る。主体部は土拡墓と推定されている。後続する1号墳は、直径21．5m高さ約3m、溝幅3．9m、主体部は木棺直葬と推定されている。方形周溝墓末期以降を考える上で貴重な遺跡である。（文献14）

以上、この時期の方形周溝墓について、既に坂本氏等がその特徴を指摘している。（文献15・2）

①　互いの周溝を共有したり接近したりせず単独で存在する傾向があること。

②　20m以上に及ぶ規模の大きい例があること。

③　方形周溝墓を築造する集団がある一方で小首長クラスの古墳が既に築かれ始めていること。

③について児玉地方では志戸川、石蒔遺跡等で方形周溝墓が造られている一方、すでに鷺山古墳を嚆矢として、以後円墳を主体とする前期古墳が築かれている。（文献2・15）　この鷺山古墳は発掘調査によって前方後方墳であることが確認されている。志戸川・石蒔の方形周溝墓群中にも前方後方形を呈する周溝墓があり、被葬者間の格差が既に生じていたことが指摘されている。荒川右岸中流域に当たる現在の、大里、比企地方では詳細な測量により前方後方墳と方墳群であると推定される江南町塩古墳群第1支群に、また方墳と併存する前方後方墳と判明した吉見町山の根古墳が知られている。（文献16）　両古墳は発掘調査を行っていないが4世紀後半代の築造と考えられており、（文献17）この地域の墳墓群の変遷を考える時、最初に出現する古墳群として重要である。特に山の根古墳は和田川、滑川流域では最古になると推定されている。塩古墳群と山の根古墳とは群集密度に差があり、坂本氏の指摘するように塩古墳群にみられる方形周溝墓的な被葬者集団のあり方は、集団から超越しきれないままの古い体質を残した共同体首長とその成員の墳墓としての性格が強いためと考えられている。本地域に出現する有力な首長墓として5世紀初頭に東松市雷電山古墳が出現する。（文献17）　新山遺跡6号墳はこの雷電山の前方後円墳が出現する前段階に当たる。

雷電山古墳は、現在の比企郡内に所在するが、現在の大里地方にとっても重要な古墳である。雷電山古墳は8支群250基以上から成る一大墳墓群（三千塚古墳群）の中心とされ雷電山以後楓山→東山古墳と継続し６世紀のとうかん山古墳→冑塚古墳と首長の系譜が跡づけられるとされる。三千塚古墳群中の第５支群、秋葉山古墳、第８支群長塚古墳は共に４０ｍ規模の前方後円墳で、内部主体に片袖型横穴式石室を採用しており、同時期、同規模として良い、和田川沿いの野原古墳、御伊勢塚古墳との類似も指摘されている。（文献17） 塩古墳群は和田川、滑川流域の最奥部に当たり、和田川沿には雷電山等の古墳の他、熊谷市御伊勢塚古墳（文献18）（前方後円墳）、江南町野原古墳（文献19）（前方後円墳）、滑川町円照寺古墳（文献20・17）（前方後円墳）がある。これらはみな６世紀代の古墳であり雷電山古墳以降５世紀代の古墳は、この地域ではほとんど見つかっていない。

滑川町屋田４号・１号墳は５世紀代の古墳として数少ない例で、４号墳は先述した安光寺・下原遺跡に見られる小円墳と同様の例と思われ、方形周溝墓終末期に現れる小円墳と考えられ、このような小円墳の被葬者は同時期の大型古墳の被葬者へ従属したものと想定されている。（文献17）この変化の時期は和泉期に当たると考えられており、カマドの出現と合わせ生活上の変化も起きている。

塩前遺跡第１号住居跡は和泉期の所産だが、カマドを有してした。（文献21） 同時期の集落は吉見町久米田遺跡、（文献16）大里村船木遺跡（文献23）に発掘調査例がある。前代の五領期の集落は塩周辺では塩前、丸山、塩西、舟川遺跡が和田川流域に位置し、江南台地中央では行人塚、原谷遺跡に住居跡が調査されている。滑川町では追越遺跡に50軒に及ぶ弥生時代終末から古墳時代初頭にかかる住居群が調査されている。（文献24） 比企丘陵を含めた江南台地の調査では、和泉期の集落は少く、カマドを持つ例はさらに少い、今後の発見も予想されるが、塩地域の場合、前方後方墳と方墳群の存在と合わせ、塩地域と周辺の歴史的位置付を見直す時期に来ている。

塩、新山などの和田川、滑川流域の集団は、肥沃な荒川、利根川の沖積地ではなく、直接荒川本流の影響を受けることの少ない支流に入り込んだ低地周辺に生活基盤を持っていた。この生活基盤に限界をみることは容易であり、これらの小首長の上位にいわば総括的な権威を及ぼす首長を戴いていた地域集団の政治的なあり方が浮かび上がって来るのではないだろうか。新山６号墳のあり方は、塩古墳群に代表される限定された地域の小首長の元にある共同体成員の墓と考えて良いのではないか。そして、このような小地域の在地集団がまとまりつつ、さらに広範な地域の連合・統一的な首長として雷電古墳に代表される被葬者が台頭して来るのだろう。今後、比企丘陵北半とかつての荒川右岸流域を含めた地域を見直すことが必要と思う。

（新井）

文献一覧

1　増田逸朗　他　1981『清水谷　安光寺・北坂』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第１集

2　坂本和俊　1986「鷺山古墳」　埼玉県古式古墳調査報告埼玉県県史編さん室

3　佐藤忠雄　1979「後榛沢遺跡群の調査」『第12回遺跡調査報告会発表要旨』

4　岡本幸男　1982「美里村志戸川遺跡群の調査」『第15回遺跡調査報告会発表要旨』

5　菅谷浩之　1984　『北武蔵における古式古墳の成立』　児玉町史資料調査報告　第1集

6　金井塚良一　1972「関東地方の方形周溝墓」考古学研究　72

7　増田逸朗　他　1977　『塚本山古墳群』　埼玉県遺跡発掘調査報告書　第10集

8　岡本幸男　他　1980　「神明ヶ谷戸遺跡の調査」『第13回遺跡調査報告会発表要旨』

9　並木隆　他　1976　「本庄市旭小島古墳群の調査」『第9回遺跡調査報告会発表要旨』

10　増田逸朗　他　1975　『千光寺』埼玉県遺跡調査報告　第27集

11　菅谷浩之　他 1974「熊谷市万吉下原遺跡第１•2次調査概要」『第7回遺跡調査報告会発表要旨』

12　剣持和夫　1984「埼玉県の方形周溝墓概観」『第５回三県シンポジュウム 古墳出現期の地域性』

13　金井塚良一　1968　『番清水遺跡』

14　今井宏　他　1984　『屋田・寺ノ台』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告　第32集

15　坂本和俊　他　1986　「前組羽根倉遺跡」『紀要　13』　埼玉県立博物館

16　金井塚良一　1978　『吉見町史』上巻

17　坂本和俊　他　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』　埼玉県県史編さん室

18　熊谷市　1963　『熊谷市史』上巻

19　柳田敏司　1962　「おどる埴輪を出土した前方後円墳について」『埼玉研究』第6号

20　金井塚良一　1979　「比企地方の前方後円墳－北武蔵の前方後円墳の研究(1)」『埼玉県立歴史資料館紀要』第1号

21　新井端　他　1982　『塩前遺跡発掘調査報告書』　江南村文化財調査報告　第3集

22　山岸良二　1981『方形周溝墓』ニューサイエンス社

23　佐藤忠雄　1974　「大里村船木遺跡の調査」『第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨』

24　木村俊彦　1986　「滑川町新井・追越遺跡の調査」『第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨』

25　中村勝　1982　「福岡県における方墳の展開とその諸相」『福岡考古懇話会々報』第11号

26　一瀬和夫　1985　「大型前方後円墳の築造計画とその施工」『古市古墳群とその周辺』

27　笹森建一　1983　『権現山遺跡の調査』上福岡市郷土史料　第29集

28　寺沢薫　1986　『矢部遺跡』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　第49冊

29　岸本道昭　1986　「前方後円墳成立期の播磨・揖保川流域」考古学研究131

30　伊藤敏行　1986　「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ」東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅳ

31　帝塚山考古学研究所編　1985　『古墳の起源と天皇陵』

第2節　新山遺跡の庚申塔と塚について

庚申信仰と塚

まず庚申について触れておきたい。庚申とは十干の庚と十二支の申とが結びついた。六十回に一度廻ってくる日や年のことである。中国の道教の思想に三尸説があるが、これは人間の体内に三尸という虫がいて、いつも人間の早死を望んでいるが、庚申の日の夜ごとに、人が眠っている間に、その人の体内から抜け出して天に昇り、天帝にその人の日常の罪過を告げる。天帝はこれを聞いてその人の死期を早めるという。

三尸の上天を防ぎ、長生きをするには庚申の日に身を慎み、一夜を眠らずに過ごすことが必要であり、身を慎み眠らずに一夜を送ることを「守庚申」と称し、七回守庚申を続ければ、三尸は長絶すると説いている。

この思想が日本に入り、奈良時代の末頃から宮延貴族の間で守庚申が行われるようになり、平安時代の末頃に武士の間に広まったようである。南北朝時代には僧侶や修験者の間に浸透して、三尸説の仏教化が始まり、室町時代に入ると僧侶によって「庚申縁起」がつくられるようになる。江戸時代には修験者が庚申信仰を説き、庚申堂の堂守になり、その指導によって信徒集団ができるまでになる。

神道でも猿田彦大神を主尊とする庚申信仰を説き、仏教では青面金剛を本尊として信仰を広め、一般大衆化が進む。このようにして講集団ができ、各地で庚申講によって供養のため庚申塔が造立されるようになった。（文献1）

庚申信仰が石造物を造立するようになるのは室町時代からで、文明三年（1471）銘の釈迦・弥陀（推定）、薬師の三尊種子板碑が知られる。これは、川口市領家、実相寺にあり「奉申待供養結衆」とあるのが最も古い。関東で江戸時代に入ってからのものでは元和九年（1623）の東京都足立区花畑、正覚院にある来迎弥陀三尊がある。（文献2）

次に庚申塔に彫られている猿についてであるが、「かのえさる」に行われることから、猿が彫られるようになったらしい。しかし三猿そのものが庚申信仰によってつくられたわけではなく、起源は古代インドで、三猿が庚申塔に現れるのは、江戸時代の承応年間（1652～1655）である。猿そのものは、室町時代末に山王信仰との結びつきにより出現し、後に三猿が現れる。三猿を庚申に結びつけたのは、三尸になぞらえ、目や耳や口をふさいで悪事を天帝に報告されないためという。（文献3）

また猿のほか鶏も多く刻まれるが、鶏について確かなことはわかっていない。鶏は古代から時を告げる神聖な鳥として飼養するのが普通であったという。平野実氏は庚申の徹夜行事は、申の日からはじまって酉の日に及ぶので、猿と鶏とを持ってきたとか、また行事は鶏明までというので、その鶏をつけたとかいう動機から始まったのではないかと述べている。（文献4）

さらに庚申塔を塚の上に置く場合もあり、これを庚申塚という。庚申塚には木の枝を立てたり、土盛を築くものがある。土盛の庚申塚は、土を盛った塚だけのものと、その上に石造の庚申塔や木の塔姿を立てるものがある。（文献5）

土盛の庚申塚を築くことを「塚をつく」・「塚つき」・「庚申のまるめ」・「まるめ庚申」など

といい、六十年に一度の庚申年、十二年毎の申年、七庚申の年、うるう年などに行われる。この塚の管掌者は修験者であったと思われる。『猪苗代湖南民俗誌』に揚げられているという橋本武氏の報告によると「…福島県郡山市湖南町館()庚申壇は……築壇は館の人々全体で行われた。この時庚申講中はもちろん講中以外の人も総出で築壇や植樹を行い、終わると、飯盛寺という寺の住職に読経や供養のことを依頼し、おもだった人々の礼拝がなされ、紅白の餅まきも行われた……」この塚の禁忌として、「むやみに壇にのぼるな」といわれており、聖地の観念が色濃く残っている。（文献6）

次に茨城県東茨城郡茨城町の旧川根村の例については「……各大字とも晦日が庚申のアタリ日になった年、七庚申の年の庚申の日に塚のつきなおしを行った。これは村落の合同でやる。当日は餅をつき、塚のつきなおしをしたあと撒き餅が行われた。塚を清掃し、その前に三か所ずつ二列に土を盛って土まんじゅうをつくる。また主塚にはうれつき塔姿を立てた。これは杉の木の梢の葉を残し、幹を削って平らにし、僧侶か神宮に青面金剛とか猿田彦大神と墨書してもらったものである。庚申待は庚申塚の築きなおしが終わってからヤドに集まって行う。（文献7）

小花波平六氏は庚申塚の発生について、庚申で土盛塚や木のつかを造立するようになったのも、多分念仏講や日待講で土の塚や木のつかを用いていた先例を踏襲したにちがいないと述べている。（文献8）

（新島）

発掘調査された庚申塚

新山遺跡の５基の塚の中で一番特徴のあるのは庚申塔を有する第5号塚である。従って、土石造物を有する塚の例を挙げて比べてみたい。塚の発掘例は近年になって増加しているが、石造物を有するという例はあまりない。管見したものでは以下の数例である。

①埼玉県大里郡寄居町大字鷹巣のお金塚遺跡。（文献9）

②千葉県我孫子市中峠字海老宿3805－２番地の中峠庚申塚。（文献10）

③千葉県印旛郡印旛村松虫字丑むぐりの庚申塚。（文献11）

④千葉県印旛郡印西町戸神字大野618の大野庚申塚。（文献12）

⑤東京都世田谷区南烏山２丁目31番地のカネ塚。（文献13）

①のお金塚は東西6.5m、南北7.7m、高さ1.8mの長方形で、盛土は４層に分けられ、一時的に積み上げたものと推測している。塚の周りに全周する溝が検出され、マウンドの西側では一部二重に巡っている。溝からはカワラケが出土し、マウンド頂部より鎌２本、盛土中より寛永通宝の破片が出土している。現在は移されているが、一時期明治12年銘の庚申塔が立っていた。そして特徴として、以下の５点を挙げている。

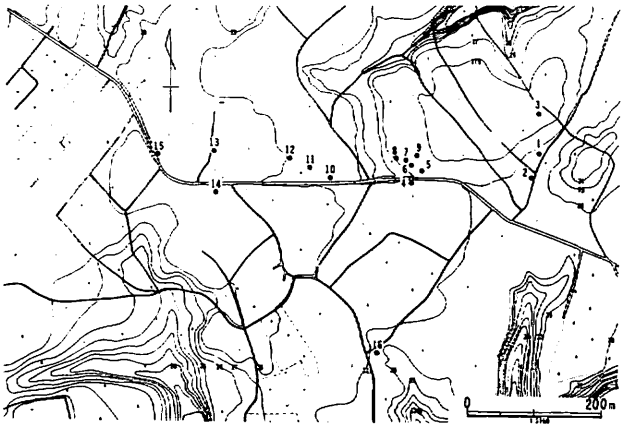
1　単独で存在する。

2　ある時期に構築当初より規模が縮少されているが、溝が全周する。

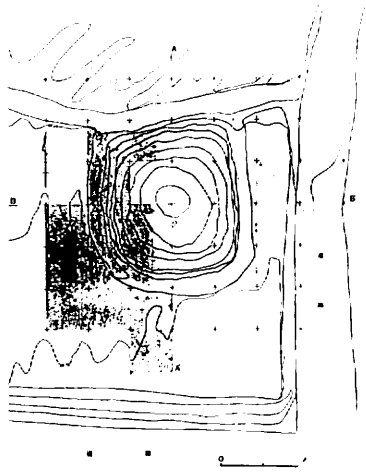
3　明確な長方形プランを呈する。

4　マウンド頂部に庚申塔が建立されていた。

5　古銭、カワラケなどの遺物が出土している。

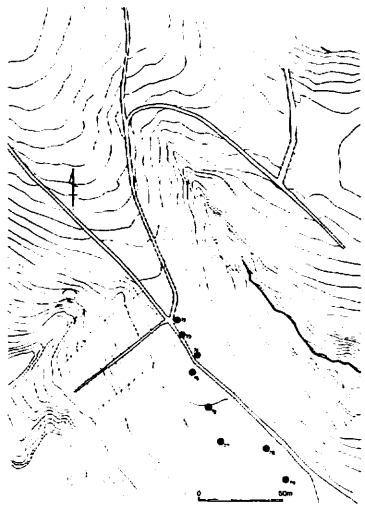


臼井第２塚群

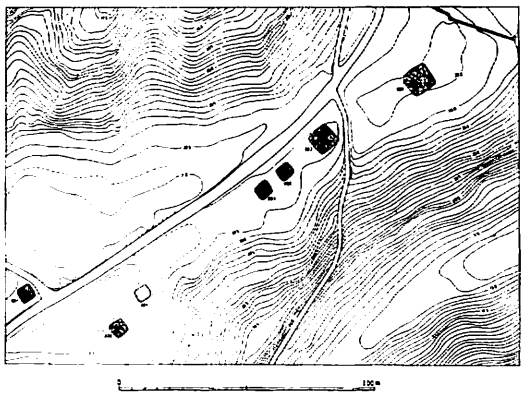


お　金　塚

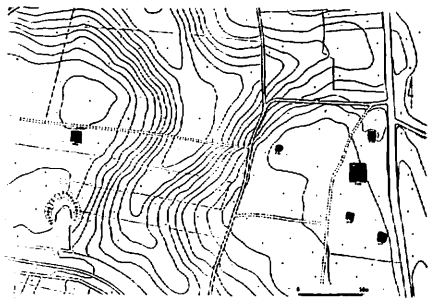
大塚塚群



児沢遺跡

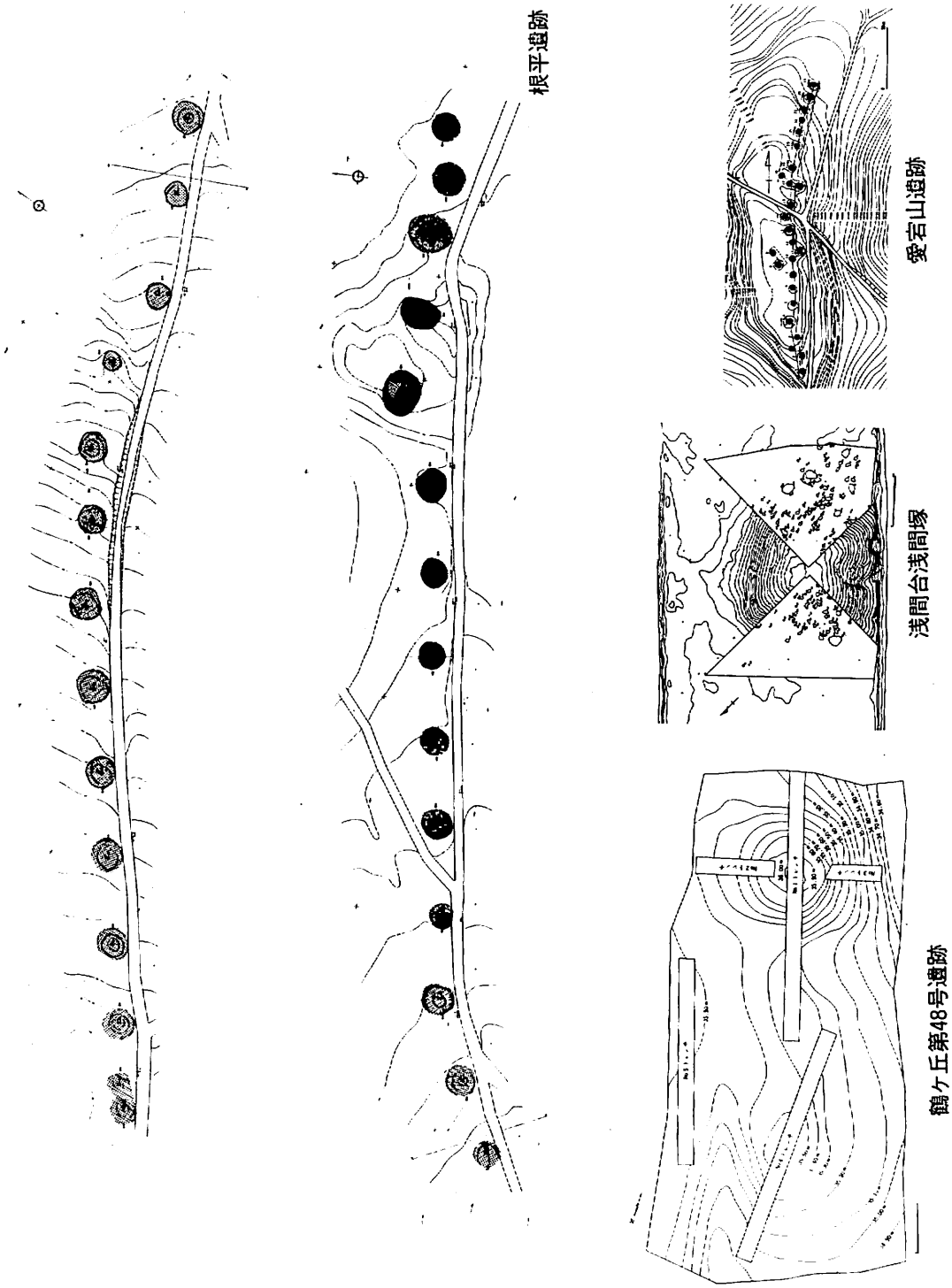


萩原出戸塚群



大門塚群

第22図　中近世の塚実測図（各報告書から転載）



第23図　中近世の塚実測図（各報告書から転載）

これらのことから、天明を下らない江戸時代に、民間信仰の対象として構築されたものと述べている。

②の中峠庚申塚は一辺約5.5m、高さ1.7mの方形状を呈し、各コーナーともゆるやかな湾曲を示す。構築は旧表土に掘り込みを加えて地山整形を行った後、ローム漸囲層と考えられる部分の土をその上に約10cm位盛土し、固くつきかためた上に台形状に盛土したとし、焼土、炭化材等を含んでいることから近辺の旧表土を削平し構築したものと述べている。

また塚の周辺から5本の溝が検出され、1号溝の南と2号溝の北に2つの土拡が確認されたが塚との関係や時期は不明である。庚申塔はマウンド中央部南側向きに台座をすえ庚申塔が置かれていたと思われるが、調査時は北向きに倒れていた。庚申塔は青面金剛像に邪鬼、三猿、二鶏と一般によく見かける形で、元禄10年（1697）の銘がある。塚の構築時期は庚申塔から江戸時代としている。

③の庚申塚は6.1m×5.5m、高さ1.25mで東南側に方形の造り出し状の丘をもち、頂上に天保2年（1831）銘の三山信仰の石碑、東南の造り出しには明治6年銘の疱瘡神の祠、北側裾郡に寛延3年（1750）銘の大乗教奉納碑がある。出土遺物は数個の河原石、瓦片、磁器片、盛土の最下部より寛永通宝2枚である。この塚は江戸時代中期頃の民間信仰の場とされていた。また村里の無病息災を祈願し、病魔が村に入って来ないよう村はずれに塚をつくったのであろうと述べている。

④の大野庚申塚は6.3m×5.1m、高さ80cmの方形で、盛土最下部から寛永通宝2枚出土し、他に土師質土器片が出土している。また表採として燈明皿が2枚検出され、庚申塔の供養に使用されたのではないかと推測している。墳頂部に天保11年（1840）の庚申塔が南面してあり、中山吉秀氏は塚と同時期のものと考えられるが、最初は塚だけ構築され、山に対する信仰がその後庚申信仰と一緒になって祀られたのかもしれないと述べている。

⑤のカネ塚は径12m、高さ1.7mの円形で、浅い周溝を伴う。この周溝からは陶器片が出土している。庚申塔は頂上に東を向いて建てられており、天保10年（1839）の銘がある。

この他に石造物ではないが、塚上から多くの瓦が出土し、塚上に瓦葺き小建物が構築されていたと推定される浦和市下大久保字堤根1044－2番地の庚申塚がある。（献文14）規模は、13m×8m、高さ1.5mの方形で、北側裾部に溝が検出されたが、塚とは関係のないものとしている。瓦の他に陶磁器、土師器、須恵器細片、寛永通宝2枚、自然石3個、骨片、さらに板碑が墳丘の中に埋まって出土したが、特別丁重に埋められたというものではない。塚上にあったと考えられる建物は他の遺物の年代からも塚築造とほとんど時期差はないと考え、18世紀を下限としている。

この庚申塚の特徴として以下の5点を挙げている。

1　単独

2　形態が上円下長方形

3　規模が13×8mと大型

4　墳頂部に小建物一おそらく祠的なものを構築していたこと

5　盛土内に板碑、土器等の遺物を伴う

以上から新山遺跡の第5号塚との共通点を挙げると、庚申塔（石造物）を塚上に建てる。②以外はみな遺物が出土している（特に①、③、④は寛永通宝が出土していることが注目される）点である。

しかし、①のお金塚のように単独ではない（この点では浦和市の庚申塚とも同様）、溝を伴わない。（これは②の中峠庚申塚や⑤のカネ塚とも同様）点が相違する。以上挙げた５例とも塚上の庚申塔や出土古銭等から民間信仰によるものとし、江戸時代中、後期としている。　（新島）

古銭出土の塚について

次に古銭を出土した塚について述べたい。

1　丁子山田遺跡（文献15）（千葉県佐原市丁子字山田）塚NO.２の周溝の土拡より古銭６枚（開元通宝、天聖元宝、嘉祐元宝、乾元重宝、聖宋元宝、景祐元宝）が出土した。この他、土師質土器坏３、釘、短刀が出土。

2　村上第２塚群（文献16）（千葉県八千代市村上字込の内、黒沢台）

１号塚のピットから皿形土器10、珠子玉６、大部分を紐を通してきつく括られた状態に重なりあった寛永通宝222枚、洪武通宝1枚、宣和通宝1枚が出土し、この南から寛永通宝6枚が出土した。２号塚の裾部から寛永通宝１枚が検出された。

3　村上供養塚（文献17）（千葉県八千代市村上）

基盤上から壺形土器２個が埋納され、その１つから寛永通宝86枚、景祐元宝1枚、至和元宝1枚、永楽通宝（国産）１枚、元祐元宝2枚が、もう１つからは寛永通宝147枚、聖宋元宝１枚、洪武通宝（加治木銭）２枚が収納されており、２個の壺に付着するように皿形土器５と寛永通宝等が出土した。構築年代は古寛永通宝から17世紀中葉としている。

4　大塚塚群（文献18）（千葉県印旛郡印西町小倉大塚）

１号塚からは皿形土器７枚、銅銭19枚（洪武通宝１枚、元豊通宝４枚、天聖元宝２枚、祥符元宝１枚、熙寧元宝２枚、淳熙元宝１枚、永楽通宝２枚、祥符□宝１枚、不明５枚）を収納する完形壺形土器が出土した。またこの他にも寛永通宝3枚出土。２号塚からは寛永通宝１枚、元祐通宝１枚が検出された。１号塚はこの他縄文土器片や布目瓦が出土し、2号塚はこの他土鍋形土器や有田焼茶碗２個体分が出土している。

5　大野庚申塚（文献19）（千葉県印旛郡印西町戸神字大野618）

寛永通宝2枚、土師質土器片が出土。

6　結縁寺塚群（文献20）（千葉県印旛郡印西町船尾結縁寺885）

６号塚から寛永通宝、獣骨、陶器片、１号塚からも古銭出土。

7　鳥見神社塚群（文献21）（千葉県印旛郡印西町宗浦東割114）

２号、３号塚から古銭出土。

8　萩原出戸塚群（文献22）（千葉県印旛郡印旛村萩原2068）

４号塚より寛永通宝6枚、文久永宝1枚、鉄製槍先が出土した。

9　庚申塚（文献23）（千葉県印旛郡印旛村松虫字丑むぐり）

寛永通宝2枚、河原石、瓦片、磁器片が出土した。

10　大門塚群（文献24）（千葉県印旛郡本埜村大字滝小字大門570番地）

３号塚からは皇宋通宝、また周溝からブレイド、６号塚から寛永通宝1枚が出土した。

11　臼井南遺跡（文献25）（千葉県佐倉市臼井字忍）

庚申塚は明らかに和紙のようなもので包まれた痕跡を止める寛永通宝181枚、宋銭１枚が出土した。

12　木更津市下部多山供養塚（文献26）（千葉県木更津市）

マウンド内から水晶石３片と寛永通宝13枚を納入した陶製の壺が出土した。

13　物見山塚群（文献27）（東松山市岩殿字入の台）

48号塚より古銭1枚出土。64号塚裾部表土中より古銭２枚出土。

14　お金塚（文献28）（寄居町大字鷹巣）

寛永通宝の破片出土。他、頂部より鎌２本、溝よりカワラケ１が出土。

15　高麗久保（文献29）（日高町大字久保字稲荷前344）15号塚の配石中より寛永通宝が出土した。

16　椿峰塚群（文献30）（所沢市山口字西椿峰1335他）１号塚より打製石斧10、磨製石斧１、石皿１、古銭10枚（開元通宝１枚、景徳元宝２枚、景祐元宝１枚、皇宋通宝１枚、熙寧元宝１枚、元豊通宝１枚、元祐通宝２枚、景定元宝１枚）が出土、10号塚より古銭７枚（開元通宝１枚、寛永通宝５枚、５銭白銅貨（大正７年）1枚）さらに裾部から五輪塔の一部出土。

17　庚申塚（文献31）（浦和市下大久保字堤根1044－2番地）

瓦、陶磁器、土師器、須恵器細片、自然石3個、板碑、骨片、寛永通宝２枚が出土した。

18　浅間台浅間塚（文献32）（上尾市浅間台２丁目１番２号、６号）

縄文土器、打製石斧、石皿、石塔、古銭、鉄製品、磁器等出土。

19　入定塚（文献33）（東京都稲城市平尾）

土壇から多くの古銭（主に宋銭、開元通宝から永楽通宝）出土し、他に板碑が出土。

20　明楽院塚（文献34）（東京都稲城市矢野口）

古鉄板、中央部下の竪穴から銅製錫杖頭部と銅銭6枚、その下から人骨1体出土。入定塚という。

21　大塚（文献35）（東京都世田谷区砧緑地内）

銅銭４枚、大小の土師質皿に12枚、付近から大観通宝１枚が出土。

22　堀口の塚（文献36）（横浜市金沢区富岡町）

皿形土器５個分以上、古銭２枚（北宋の熙寧元宝）が出土。

23　中与惣塚（文献37）（長野県北佐久郡立科町雨境峠）

宋銭、薙鎌、懸仏（御正体）、鉄釘が出た。

24　川治百塚（文献38）（新潟県十日町市川治）

確認された19基のうちから火葬人骨、古銭、和鏡などが出土。

25　中山５号塚（文献39）（新潟県長岡市宮本東方町）

北宋銭ほか６枚1組の銭貨が出土。「集団墓」ないしは「集団墓的供養塚」と考えられている。

26　正家積石塚群第３号積石塚（文献40）（岐阜県恵那市長島町正家字大洞114番地の８）

火打鎌１個、銅銭２枚（元豊通宝、永楽通宝）が出土。

以上のように古銭を出土する塚は多数みられるが、塚の全体数からすると多くはない。また古銭を出土した塚とそうでない塚とに特別の違いがみられるわけでもない。ただ古銭を盛土内に埋めたものやその付近から検出されたものなどは、塚を整理し何らかの祭祀的行為がなされたと考えて間

違いがない。

新山第５号塚中の黒色土とその付近から６枚の古銭が接近して出土しているところから礫上に六道銭として埋納した可能性がある。あるいは黒色土上の層から出ている６枚の古銭が六道銭で下の黒色土の範囲の古銭は塚築造の祭祀を行ったものかもしれない。合計12枚の古銭が出土しているわけであるが、和歌山県有田郡金屋町中峰の鈴木家住宅の例では、礎石の南側ピット内の鉄鍋の中から寛永通宝12枚を銅線で綴ったもの２連が出土している。これは住宅の地鎮のためのものであり、直接塚と関係しないが、行者が密教的な行事を行った可能性が指摘されている。（文献41）

塚とは人工的なマウンドをもつもので古墳時代においては巨大な墓であったわけだが、古代になると経典を埋納する経塚や土塔がつくられる。しかしこれらは今までとりあげてきた塚の範囲外で、ここでいう塚はこれ以後築造されるようになったようである。塚を大別すると民間信仰上からの造立による、富士塚、三山塚、狐塚、庚申塚、二十三夜塚等と行人や道者の修行場または祭場、入定跡に属する行人塚、山伏塚、念仏塚、法印塚等がある。（文献42）また塚に対する伝説も多くの場合、塚に触れると祟りがある的なものである。（文献43）十三塚の伝説では戦死者を葬ったというもの、非業の死をとげたというものが多い。（文献44)さらに塚の所在であるが、十三塚については多く国や郡や村の境界線上に築かれる。（文献45)新山遺跡の塚も小江川から滑川町の和泉へ出る道だったらしく、村境にわりと近い所にある。この村境や街道沿いにある塚は堀一郎氏も述べているように村へ病気や災害等が入ってこないためのものとして築造されたと考えられる。（文献46）さらに池田亨氏は山の高い尾根や村の境に塚を造営した理由として、塚造営が悪霊を払い、塞ぐ意味を祖霊に依頼する。また境界塚の目的ではなく、御霊信仰の顕現として塚を造営したのではないかと述べている。（文献47)付け加えれば、新山第３号～第５号塚の北に方形周溝をもつ6号墳があり、方形周溝墓の可能性がある。また方形周溝墓だとしても先の多くの塚や十三塚中には古墳が混じっている例もあるので、６号墳も第１～第５号塚と同様の性格、意識をもつ場所、遺構として利用または信仰されたかもしれない。地元では西古墳群を「観音塚」と呼んでいた。　　（新島）

年代について

塚にはマウンドに付随施設を伴うもの(周溝、土塁、舌状の張り出し、基底面下に土拡を有する)と伴わないものとに分けられるが、後者を一般とする。（文献48）

『十三塚』において中村考三郎氏の編年試案が発表されている。（文献49）

Ⅰ期　塚中に鏡、刀子などを埋納している（平安時代）。

Ⅱ期　大形墳丘が眺望のよい高所に1基のみ所在する。経甕、古銭などを埋納するもので、御来光信仰、座り念仏願成としての塚経営。

Ⅲ期　直線配置形式の列塚（百塚など）造営され、観音信仰や歩き念仏供の顕現とされる。

Ⅳ期　塚が不規則に配置される。寛永通宝などを伴出する江戸時代に入ってからの築造塚。

Ⅴ期　庚申塚、塔に連続するもので江戸中期以降の塚

と５期に分類している。

池田亨氏は中村氏の編年を基に、十三塚を中村氏のⅢ期の築造とし、Ⅲ期をさらに細分している。

ⅢA期　南北方向を原則として一列に配置するのが基本型（南北朝時代）。

ⅢB期　塚配列に変化と乱れが生じてくる。（15世紀末頃まで）

ⅢC期　数基の塚が無規則的に群集する十三塚が建設される。

谷内尾晋司氏は「宗教的産物としての塚」として５分類している。（文献50）

Ⅰ　盛土面下に埋納施設を伴う塚。

Ⅱ　盛土中に埋納施設を伴う塚で“経塚”として認識されている塚。

Ⅲ　盛土の上に奉斎施設を伴う塚でマウンドの上に信仰標識としての祭祀施設を造営している塚。（奉斎施設は人々の信仰標識である祠や石仏などであり、塚のその奉斎施設の台座的役割を果たし施設の存在を明示する為の標識であったと考えられる。）

Ⅳ　盛土によりマウンドを築き施設を伴わない塚で、塚の造営目的が埋納、奉斎施設から離れ盛土によるマウンドの築造が主体となった塚で施設を全く持たない。マウンドの築造も盛土を主体とするが、盛土と削り出しの積用や集石などが認められる。（塚＝マウンドと認識され、マウンドを築く事が信仰の具現であり信仰行為の一端と捉えられていたと考えられる。）

Ⅴ　削り出しによりマウンドを形成し施設を伴わない塚である。

さらに鶴ケ丘第48号遺跡では斉藤稔氏がA、B、C類の３分類している。（文献51）

A類　複数で群在するもので、江戸時代前半以前の構築で、旗塚といわれる根平、児沢、立野、物見山の塚群など。

B類　単独に存在し、古銭やカワラケを出土し、天明期を下らない江戸時代、民間信仰によるもので溝が全周するお金塚など。

C類．２基の塚からなる鶴ケ丘第48号遺跡を掲ている。時期は鎌倉～室町時代とし、性格は、行人塚などを考えている。

谷内尾氏の分類と鶴ケ丘第48号遺跡の斉藤稔氏の分類を中村氏と池田氏の編年にあてはめてみると、

Ⅰ期には谷内尾氏のⅠ・Ⅱ。

Ⅱ、Ⅲ期には谷内尾氏のⅣ、斉藤氏のC類、池田氏細分のⅢA、ⅢB期には斉藤氏のA類、ⅢC期には谷内尾氏のⅣ

Ⅳ期には谷内尾氏のⅢ、Ⅳ

Ⅴ期には谷内尾氏のⅢ、斉藤氏のB類となろう。谷内尾氏のⅤは時期的には決められないため、対応させていない。新山遺跡の塚をこの中にあてはめるとⅢB期からⅤ期にかけての築造と考えられる。

以上諸氏の編年から、平安時代から鎌倉時代にかけて盛土下面や盛土中に埋納施設を伴う経塚等が築かれ、多く単独である。Ⅲ期の鎌倉時代から江戸時代の初めにかけては多くの塚が群在して中には数十、百基以上も築かれる。これらの塚群は遺物を伴なわない例が多く、あっても古銭等の限られた遺物だけである。江戸時代前期以降は単独か、数基がかたまって築かれ、頂部には石仏等の石造物を伴う例がある。（新島）

塚はほとんど遺物を伴うことがない。（文献52）従って発掘調査によっても塚構築の年代を明らかにできることは少い。まれに、出土した土器や古銭、塚上の石仏から推定できるが必ずしも出土遺物と同時期であるとは限らず、上限や下限を想定しているにとどまる。

埼玉県内の塚をみると（第４表）、物見山塚群は、「少なくとも江戸前半期以前」としており、お金塚は「天明期を下らない江戸時代に、民間信仰上の対象として構築」したと述べている。高麗久保は「江戸時代までは逆のぼることが可能」とし、椿峰塚群では「中世末期 - 近世初頭にかけて」として、第1号塚を13～14世紀、第10号塚を、18世紀とする。浦和市の庚申塚は「瓦、古銭等の遺物の年代は１８世紀を下限」とし、塚も時期差はないとする。鶴ケ丘第48号遺跡の２号墳については、鎌倉末～室町時代と考えている。

前述したように新山遺跡の第５号塚上には、延宝八年（1680）の庚申塔があり、盛土中から祥符通宝と寛永通宝が出土している。祥符通宝の鋳造は北宋の1008～1016年で、11世紀を上限とできる。しかし最新の遺物は寛永通宝であり、初鋳は、1636年以降とされており、庚申塔の移動はないとすると1636～1680年の間に塚が築造されていると考えられる。塚、庚申塔と意図され順次築造されたとしても矛盾はない。おそらく塚を築いた人々には庚申塔に刻まれた8人も深く関わっていたのだろう。碑銘にある人物の半数は、現在も、同地域に同姓を名乗る家があり、また現在も献花、祭祀の継続を考えると、庚申塚としての性格を窺うことができる。但し、これが塚築造の動機を示す証拠としては断定できない。

（新井・新島）

塚関係文献一覧（第Ⅳ章第2節、第４表と同一番号）

1　平野營次　1981「庚申塔」庚申懇話会　『石仏調査ハンドブック』　雄山閣
2　文献1と同
3　小花波平六　1975「猿像を刻む庚申塔」『日本石仏辞典』　庚申懇話会編
　小花波平六　1978　「庚申信仰と三猿」　『民間信仰の研究　庚申』　同期社
4　平野実　1969『庚申信仰』角川選書
5　小花波平六　1975　「つかと塚」『日本石仏辞典』　雄山閣
6　文献5・8と同
7　更科公護　1972「茨城町川根地区の庚申講」『茨城の民俗』11茨城民俗学会
8　小花波平六　1979「庚申」『講座、日本の民俗　宗教3』　弘文堂
9　今井宏　1982『お金塚・鶴巻、他』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第16集
10　安藤杜夫　1982『中峠庚申塚』　我孫子市中峠1号墳発掘調査会
11　中山吉秀　1974『庚申塚』　千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書　Ⅱ
12　中山吉秀　1975『大野庚申塚』千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書　Ⅲ
13　品川裕昭　他　1981『鳥山城跡・鳥山南原遺跡予備調査報告書』世田谷区教育委員会
14　青木義脩　他1983『庚申塚』浦和市遺跡調査会報告　第27集
15　城前喜英　1984『丁子山田遺跡・歴後谷後遺跡』北総古代文化研究会
16　野村幸希　「下総における塚の類型」『立正史学』46号　立正大学史学会
　天野努　1974「村上第２塚群」『八千代市村上遺跡群』房総考古資料刊行会
17　村田一男　1974『千葉県八千代市村上供養塚発掘調査報告書』八千代市教育委員会
18　野村幸希　1975『大塚塚群』千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書　Ⅲ
19　文献12と同

20　中山吉秀　1976「結縁寺塚群遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅴ
21　高木博彦　1976「鳥見神社塚群遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅴ
22　佐藤克巳　1974『萩原出戸塚群』千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書　Ⅱ
23　文献11に同
24　中山吉秀　1974『大門塚群』千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告　Ⅱ
25　川端弘士　1975「渡戸Ｂ地点－庚申塚、４人塚」『臼井南』佐倉市教育委員会
26　天野努他　1973「木更津市下部多山供養塚」『袖ケ浦山野貝塚－付木更津市下部多山供養塚－』
27　水村孝行　他　1980『物見山塚群』埼玉県遺跡発掘調査報告書　第24集
28　文献9に同
29　柳田敏司　他　1977『高麗久保』高麗久保地域学術調査団
30　並木隆他　1984『椿峰遺跡群』所沢市文化財調査報告書　第12集
31　文献14に同
32　赤石光資　他　1983『浅間台浅間塚』上尾市文化財調査報告　第１５集
33　大場磐雄　1967「歴史時代にける塚の考古学的考察」梅沢重昭1963「南多摩郡入定塚と出土の板碑」『武蔵野』42－３　『末永正雄先生古稀記念古代学論叢』
34　以下35、36、37は文献33に同
38　波田野至朗　1980「越後の塚」「考古学ジャーナル」182号
39　文献38に同
40　高橋信明　他　1983『正家積石塚群』南山大学人類学博物館紀要　第5号
41　松田正昭　1984「和歌山における地鎮・鎮壇の遺構」『古代研究』28・29号
42　大場磐雄　1971「神道」『新版　考古学講座』　第8巻
43　城前喜英　1984『増田長峰』北総古代文化研究会
44　池田享　1984『十三塚現況調査編』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告　第9集
45　堀一郎　1972「十三塚」『神道考古学講座』第5巻
46　文献45に同
47　文献44に同
48　文献16に同
49　中村考三郎　1970『朝日百塚遺跡』越路町教育委員会
50　谷内尾晋司　1982　『女郎塚遺跡』能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告　Ⅰ
51　斉藤稔　1984『鶴ケ丘第84号遺跡』鶴ケ島町教育委員会
52　文献16、33に同
53　野部徳秋　1974「弁天山、他」埼玉県遺跡発掘調査報告書　第５集
54　水村孝行　1980「根平」埼玉県遺跡発掘調査報告書　第27集
55　今井　宏　1980「児沢、立野、大塚原」埼玉県遺跡発掘調査報告書　第28集
56　今井　宏　他　1984「屋田、寺ノ台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告　第32集
57　植木　弘　1980「金平遺跡」嵐山町教育委員会
58　植木　弘　1982「山根遺跡の調査」第16回　遺跡調査報告会発表要旨
59
60
61
62　青木義脩　1964「よろい塚の発掘調査」浦和市教育委員会

（文献　第Ⅱ章２）

1981　滑川村史

1983　嵐山町史

1980　新編　埼玉県史　資料編6　中世2

1971　新編武蔵風土記稿　第11巻　雄山閣版

埼玉県立歴史資料館編　1982 埼玉県歴史の道調査報告書 県内鎌倉街道伝承地所在確認調査報告書

埼玉県立歴史資料館編　1984　中世域館跡調査概報　(2)

1976　三ツ峠　山梨県南都留郡西桂町教育委員会

1977　神鈴峠　山梨県南都留郡西桂町教育委員会

小山一成　他　1985　「富士講」　あしなか　第190輯　山村民俗の会

小山一成　1980　「無窮会本、野中家本　富士の人穴草子」『立正大学文学部論叢』67

埼玉県立文書館編　1984　埼玉県寺院聖教文書遺品調査報告書

第V章　ま　と　め

新山遺跡で検出された遺構・遺物の詳細は本文で述べたので、当時の様相を考えてみよう。

6号墳は、本地域では終末期の方形周構墓と考えたが、この時期は県内でも同様の性格を示すようだ。6号墳以降に続く集団の墓は調査されていないが、新山の同一丘陵上の西端に西古墳群があり、おそらく系譜を引くものであろう。6号墳のフク土より出土した鬼高式の壺は、この段階まで祭祀が続けられていたことの証左であり、新たな造墓の場所が新山から西へ移ったと考えられる。西には前方後円墳は見当たらず、大規模な円墳もない、10m規模のほぼ等質な円墳群で構成されており、集団自体の規模、社会的位置はさほど有力とは思えない。西の周辺は和田川までの緩やかな北斜面には、古墳時代前～後期の土師器等が広く散布しており、新山・西古墳群の被葬者集団はここに（船川遺跡等）居住していたと考えられる。和田川上流の塩古墳群の被葬者集団が居住していた正木谷、丸山、塩西遺跡等では五領式の土器、遺構が検出されており、塩地区周辺の弥生末～古墳時代初頭の遺跡は、和田川下流の大里村船木、丸山遺跡の他、新山遺跡に近い滑川町船川遺跡がある。これらの遺跡は大里村例を除くと、みな和田川右岸の比企丘陵北縁に位置している。対岸の江南台地域では、和田川沿に弥生末～古墳時代初頭の遺跡は知られてなく、右岸とは異なった開発のあり方を示しているようだ。このことは、野原古墳群中の前方後円墳と滑川町円照寺古墳とが対面しており依処する集団の別を表すかのようだ。塩古墳群については4～7世紀まで続く大古墳群であって、嵐山町の尾根古墳群も滑川・和田川流域の集団に含めて考えるべきと思うが、今後、集落跡の調査を踏え検討したい。新山遺跡あり方は、地形的に尾根続きの塩古墳群の集団から、分村・枝村等のゆるやかな分離の状況を示しているのではないだろうか。塩地域の開発に成功した後の集団は和田川・滑川流域周辺の開発を活発に進めていったのだろう。

5号墳は築造に際して祭祀が行われた。集石と6枚の古銭は地祭に供された埋納物である「鎮物」であろうか。「鎮物」とすると第Ⅳ章で述べたように12枚で「鎮物」に使われた例があり、6枚では「六道銭」とすると無理がない。塚築造期である寛永期以降は身分制度による民衆の支配と伴に寺壇制度により冠婚葬祭まで支配が完成された時期であった。一般の百姓は請寺の墓地、一族一家の墓地に埋葬するのが通例であった。とすると、峠の塚に葬られた人物は常人ではなく、行者・道人等の人間であったろうか。しかし、本遺跡の場合この考えには否定的である。塚の築造と庚申塔の造立の時期差が最長40数年あるとしても、人墓上に庚申塔を建てるとは考えにくいのではないか。人以外のもの、馬や牛と考えられないだろうか。新山の往路は和泉へ至り菅谷－小川方面へ抜ける峠であり、村境に当っていた。明治に造立された馬頭観音塔は峠の坂道を見守っており、この峠道は牛馬にとって苦しい道だったことを物語っている。また村境に庚申塔、塚、青面金剛塔を建てることは通例であった。これらの造立に際して修験者の関わりが予想され、並列する塚や、類似の規模・構築法などは祭祀上の規制の現れと考えたい。江南町には中世以来の有力な修験寺院が続いていたことや、江戸時代中期には千代山伏と称する有能な先達を輩出するなど修験道の広まりは深く日常的なものであったろう。塚、塔の造立の契機については、当地域の庚申講などの実態が解明されることが必要だが、新山塚群の資料的、歴史的価値を低めるものではないだろう。　（新井）

第4表　発掘調査の実施された近世塚群（埼玉県内）

No.	遺　跡　名	立　地	平面形	規　模	土層	遺構遺物他	備　考	文　献
1	東松山市岩殿物見山1号塚	丘陵上	円　形	3.5、0.5	2			27
2	同　2号塚	〃	略円形	4.0～0.45×0.75	3			
3	同　3号塚	〃	円　形	5.5 1.1	4			
4	同　4号塚	〃	楕円形	6.5×5.0×1.2	3			
5	同　5号塚	〃	〃	5.0×3.6×0.9	3			
6	同　6号塚	〃	〃	3.8×3.2×0.6	2			
7	同　7号塚	〃	略円形	5.0×0.7	3			
8	同　8号塚	〃	〃	5.5×1.0	3	下から長方形の土拡裾部に2.3×1mの範囲に集石		
9	同　9号塚	〃	楕円形	5.0×4.7×0.85	3	裾部表土直下から集石（3×2m）の範囲		
10	同　10号塚	〃	楕円形	2.5×2.0×0.6	2			
11	同　11号塚	〃	〃	3.5×3.1×0.7	2	第2層中に巨大礫を含む西側表土直下（1.2×0.8）に巨大礫集		
12	同　12号塚	〃	略円形	4.0×0.8	3	北西と南東裾部（1.0×0.7）（0.6×0.3）に集石		
13	同　13号塚	〃	円　形	1.0×0.7	3	直下から土拡（隅丸の長方形）盛土から土師器須恵器片		
14	同　14号塚	〃	〃	2.0×0.5	3			
15	同　15号塚	〃	略円形	4.1×0.8	3	第3層上層に円礫		
16	同　16号塚	〃	円　形	4.8×1.2	3	第3層中に円礫		
17	同　17号塚	〃	楕円形	4 ×3.5×0.5	3			
18	同　18号塚	〃	略円形	4.0×1.0	3	第2、3層中に円礫直下に（2.5×1.3）焼土落ち込み有、土師器須恵器片		
19	同　19号塚	〃	略円形	4.5×3.8×0.8	2	裾部表土直下（2.5×1.5）に礫が分布		
20	同　20号塚	〃	円　形	6.0×1.3	3	第2、第3層に中に巨大礫を含む		
21	同　21号塚	〃	略円形	4.7×0.6	2			
22	同　22号塚	〃	楕円形	4.0×3.3×0.6	2			
23	同　23号塚	〃	略円形	6.0×1.3	4	第2、第3層及び表土中寄り土師器片		
24	同　39号塚	〃	略円形	7.0×1.5	4	第4層は下層に小石第3、第4層に須恵器片		
25	同　40号塚	〃	円　形	4.5×0.5	2			

No.	遺跡名	立地	平面形	規模	土層	遺構遺物他	備考	文献
26	物見山41号塚	丘陵上	略円形	4.5×0.85	3			27
27	同 42 号塚	〃	略円形	5.0×1.2	3			〃
28	同 43 号塚	〃	円形	5.0×0.9	3			〃
29	同 48 号塚	〃	略円形	5.5×0.75	2	第1層中より古銭1枚		〃
30	同 56 号塚	〃	円形	3.5×0.6	2			〃
31	同 64 号塚	〃	〃	2.5×0.6	3	第3層中小石を含む裾部表土中より小銭を2枚		〃
32	同 66 号塚	〃	楕円形	2.6×1.6×0.5	3	第3層中に小石を含む		〃
33	東松山市田木字弁天山 弁天山遺跡 1号塚	〃	円形	3.5×0.7	2	盛土中から須恵質甕形土器片		53
34	同 2 号塚	〃	〃	5.5×1.15	2			〃
35	同 3 号塚	〃	〃	3.6×0.55	2			〃
36	同 4 号塚	〃	〃	5.0×1.0	3	盛土中から須恵質杯1点甕形土器の破片		〃
37	同 5 号塚	〃	〃	5.8×1.0	3	第2層中に円礫が配列、頂部から土師質甕形土器と杯形土器		〃
38	東松山市田木字字根平 根平 93号塚	〃	略円形	5.5×0.88	2			54
39	同 94 号塚	〃	〃	5.0×4.5×0.6	4			〃
40	同 95 号塚	〃	円形	6.0×1.23	4			〃
41	同 96 号塚	〃	略円形	6.5×6.0×1.03	4			〃
42	同 97 号塚	〃	円形	6.0×5.8×0.75	3			〃
43	同 98 号塚	〃	〃	6.0×0.76	3			〃
44	同 99 号塚	〃	略円形	6.5×6.0×0.9	3	盛土より杯2点，表土より甕1点		〃
45	同 100 号塚	〃	〃	7.0×6.0×0.97	3			〃
46	同 101 号塚	〃	楕円形	6.5×5.5×0.85	3			〃
47	同 102 号塚	〃	略円形	7.0×6.0×0.94	2			〃
48	同 103 号塚	〃	円形	5.5×4.5×0.67	2			〃
49	同 104 号塚	〃	〃	5.0×0.7	2			〃
50	同 105 号塚	〃	〃	5.1×5.0×0.64	2			〃
51	同 106 号塚	〃	楕円形	7.0×6.5×0.9	2			〃
52	同 107 号塚	〃	円形	5.0×0.54	2			〃
53	同 108 号塚	〃	略円形	5.0×4.5×0.7	2			〃
54	同 109 号塚	〃	円形	6.5×0.76	2			〃

No.	遺跡名	立地	平面形	規模	土層	遺構遺物他	備考	文献
55	根平110号塚	〃	楕円形	6.0×5.0×0.74	2			54
56	同111号塚	〃	円形	6.0×5.0×0.83	2			〃
57	同112号塚	〃	楕円形	6.5×5.5×0.92	2			〃
58	同113号塚	〃	楕円形	6.5×5.5×0.92	2			〃
59	同114号塚	〃	不整形	5.0×4.5×0.26	2			〃
60	同115号塚	〃	不整円形	5.5×5.5×4.0	1	下に土拡		〃
61	同116号塚	〃	楕円形	8.0×7.0×1.16	1	下から和泉期の住居址		〃
62	同117号塚	〃	略円形	6.5×6.8×1.10	1			〃
63	同118号塚	〃	円形	5.5×0.9	1			〃
64	東松山市田木字児沢，児沢72号塚	〃	〃	5.5×5.8×0.95	3			55
65	同73号塚	〃	〃	6.0×1.5	3			〃
66	同74号塚	〃	〃	4.0×0.7	2			〃
67	同75号塚		楕円形	5.5×5.0×1.3	3			〃
68	同76号塚	〃	略円形	6.0×5.8×1.3	3			〃
69	同77号塚	〃	円形	6.0×5.8×1.3	3			〃
70	同78号塚	〃	〃	4.0×0.7	3			〃
71	同79号塚	〃	略円形	4.8×4.6×0.9	3			〃
72	東松山市田木字立野，立野80号塚	〃	楕円形	5.2×0.6	2	盛土中より坏		55
73	同81号塚	〃	円形	5.0×0.7	2			〃
74	同82号塚	〃	〃	5.8×0.65	3			〃
75	同83号塚	〃	不整円形	6.0×0.9	3			〃
76	嵐山町大字川島字屋田，屋田塚	〃	略円形	5.56×5.3×1.0	3			56
77	滑川町大字水房字寺の台，寺ノ台第1号塚	〃	〃	6.0×5.8×12.5	5	カワラケ1点		〃
78	同2号塚	〃	〃	4.2×3.8×1.1	4			〃
79	嵐山大字志賀字金平，金平塚	〃	〃	6.0×1.5	6	下に土拡		57
80	寄居町大字鷹巣，お金塚	〃	長方形	7.7×6.5×1.8	4	溝1底面上よりカワラケ1点頂部より鎌2本、盛土中より寛永通宝、明治12年の庚申塔が立っていた	江戸時代、天明期を下らない	9
81	日高町大字久保字稲荷前，高麗久保1号塚	〃	正方形	5.5×5.5×0.6		上部に石組A群		29

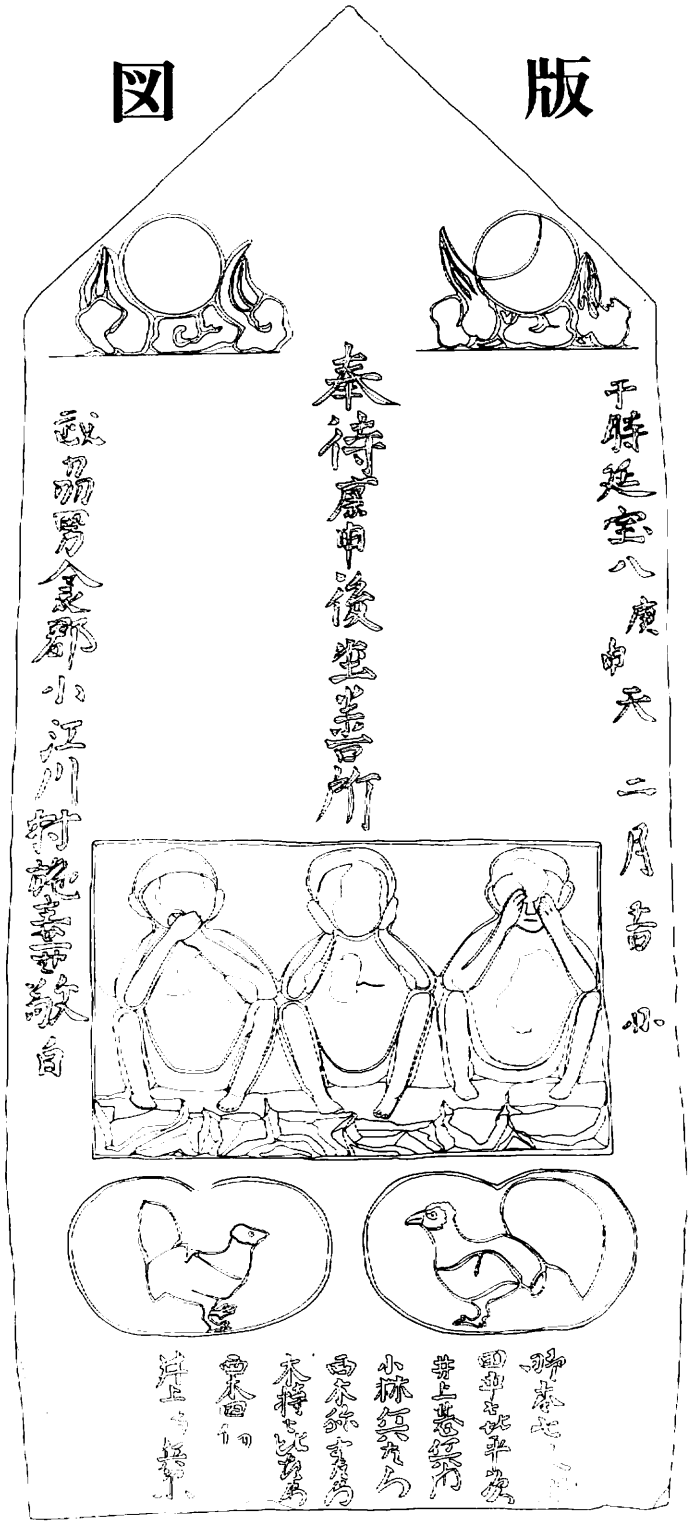
No.	遺跡名	立地	平面形	規模	土層	遺構遺物他	備考	文献
82	高麗久保 2号塚	丘陵上	方形	5.0×4.9×0.8	2	A		29
83	同 3号塚	〃	隅丸方形	7.0×6.7×1.5	5	A		〃
84	同 4号塚	〃	円形	4.6×4.0×0.6	2	A		〃
85	同 5号塚	〃	不整円形	5.5×5.0×0.8	3	A		〃
86	同 6号塚	〃	円形	5.0×4.3×0.8	2	B		〃
87	同 7号塚	〃	〃	4.2×3.8×0.75	2	B		〃
88	同 8号塚	〃	隅丸方形	4.0×4.0×0.8	3	B		〃
89	同 9号塚	〃	〃	4.3×4.1×1.1	2	集石B		〃
90	同 10号塚	〃	方形	6.0×5.5×1.0	1	A		〃
91	同 11号塚	〃	隅丸方形	3.5×3.5×0.6	1	A		〃
92	同 12号塚	〃	不整円形	2.6×2.2×0.35	1	A		〃
93	同 13号塚	〃	方形	3.5×3.2×4.0		頂部から40cm下に角礫の配石A		〃
94	同 14号塚	〃	〃	3.5×3.5×0.7	1	A		〃
95	同 15号塚	〃	〃	3.3×3.1×0.5	1	大形の石、4個を配石，配石中より寛永通宝A		〃
96	同 16号塚	〃	〃	3.0×3.0×0.45	1	A		〃
97	同 17号塚	〃	円形	5.5×4.5×0.8	3	C		〃
98	同 18号塚	〃	〃	5.0×4.8×0.65	2	C		〃
99	同 19号塚	〃	〃	4.6×3.7×0.55	2	C		〃
100	同 20号塚	〃	〃	4.0×3.3×0.65	2	C		〃
101	同 21号塚	〃	方形	5.5×5.2×1.2		E		〃
102	同 22号塚	〃	円形	3.5×3.0×0.6		D		〃
103	同 23号塚	〃	〃	4.0×3.8×0.65		D		〃
104	同 24号塚	〃	〃	3.5×2.1×0.45		D		〃
105	同 25号塚	〃	〃	4.0×3.5×0.6	2	集石D		〃
106	同 26号塚	〃	〃	2.6×2.5×0.4	2	D		〃
107	同 27号塚	〃	〃	1.4×1.3×0.3	1	集石D		〃
108	同 28号塚	〃	〃	2.6×2.3×0.5	2	D		〃
109	所沢市山口字西椿峰，椿峰塚群第1号塚	〃	〃	7.6×1.45	5	打製石斧10点，磨製石斧1石皿1，古銭10枚	13世紀～14世紀	30
110	同 2号塚	〃	〃	4.6×0.4	2	打製石斧2点，自然地形の可能性有		〃
111	同 3号塚	〃	〃	6.7×1.35	5	砥石1点		〃
112	同 4号塚	〃	楕円形	6.0×4.4×0.9				〃

No.	遺跡名	立地	平面形	規模	土層	遺構遺物他	備考	文献
113	椿峰塚群　5号塚	丘陵上	方円形	6.2-6.8×1.1	8			30
114	同　6号塚	〃	不整形	4.0×0.35		中央下に不整土拡，溝　地膨れ状		〃
115	同　7号塚	〃	長楕円	6.5×0.75	2	溝		〃
116	同　8号塚	〃	方円形	7.5×1.4	6	磨製石鏃1		〃
117	同　9号塚	〃	不整形	4.2×0.95	2	地膨状，東側に溝		〃
118	同　10号塚	〃	円形	5.1×1.25	11	裾部から五輪塔の一部古銭7枚	18世紀	〃
119	富士見市滝瀬字茶立久保，オトウカ山古墳	台地上	方形	23.0×23.0×4.8		古墳とも塚ともはっきりしない溝		44
120	浦和市下大久保提根，庚申塚	〃	〃	13.0×8.0×1.5	12	瓦陶磁器板石塔婆、古銭　自然石、骨片他，塚上に瓦屋根の建物があったことを推定させる。	18世紀を下限	14
121	大井町鶴ケ岡字外，鶴ケ岡1号塚	〃	楕円形	8.9×8.65×1.0	12			44
122	浦和市三室字西宿，宿の二ツ塚第1号塚	〃	方形	東西，5.5×0.75	6	中央したピット頂部に板石塔婆42基土を固めフク土盛		45
123	同　第2号塚	〃	不整方形	長辺，7.5×1.0				〃
124	日高町大字中鹿山愛宕山，愛宕山遺跡	丘陵上	〃	最大のもの6.0 最小のもの1.5	高さ最高のもの0.8 平均0.4	25基の塚が尾根づたいに150mの間に点在		46
125	坂戸市多和目字愛宕下毛呂山町下川原上殿下川原愛宕遺跡	〃		15.0×3.0		十三塚		47
126	草加市氷川町氷川御殿屋稲荷古墳	沖積地				水田中に所在する塚		48
127	坂戸市石井字大智寺後天神塚、稲荷塚	台地上				祠を祀るために盛りあげた塚		〃
128	川口市差間字立野橋後立野橋後遺跡	沖積地						49
129	寄居町用土大字新堀新堀遺跡	台地上						44
130	与野市円阿弥円阿弥古墳	〃		16.0×2.0		溝1縄文土器打製石斧、土師器、石皿、須恵器、上部に土拡1、塚である可能性高い		50
131	大井町大字亀久保字東久保，東久保南遺跡（第1地点）	〃				縄文土器，内耳土器，「古墳ではなく近世の塚の可能性高い」		52

No.	遺跡名	立地	平面形	規模	土層	遺構遺物他	備考	文献
132	上尾市浅間台，浅間台浅間塚	台地上		42.0×38.0×4.8		縄文土器、打製、石斧、石皿、石塔、古銭、鉄製品、磁器など江戸時代後期の富士（浅間）塚		32
133	嵐山大字遠山字山根，山根遺跡	〃				13世紀の塚1基		58
134	日高町大字馬引沢字向原向原遺跡	〃	円形	11.3×11.0×1.7		縄文土器，打製石斧		59
135	飯能市矢颪字滝尾塚，滝尾塚遺跡（第6号）	〃				墳丘と思われた部分に祠の積石と浅い数個所の溝		60
136	川越市的場字南女堀御伊勢塚（霞ケ関5号）	台地上						61
137	川越市豊田新田字引ケ谷，引ケ谷遺跡	〃	楕円形	18.0×16.0×3.5		下に石組を有する火葬施設1基古墳時代初頭の土器片		62
138	鶴ケ島町大字鶴ケ丘（太田ケ谷）鶴ケ丘第48号遺跡1号墳	〃	円形	7.3×6.7×1.0	11	下から土拡、中から炭化物、骨片、表土層より土師質土器板碑片		51
139	同　2号塚	〃	〃	8.5×7.0×0.4	8	下から方形の周溝		〃
140	寄居町大字赤浜字鶴巻，鶴巻第1号塚	〃	隅丸方形	8.5×7.0×0.5	3	地ぶくれ，裾部より馬の歯		9
141	同　第2号塚	〃	不整楕円形	8.5×5.2×0.3	3	地ぶくれ第2層下から馬の歯	鎌倉末～室町時代	〃
142	同　第3号塚	〃	略長方形	15.5×9.6×0.8	3	地ぶくれ、第2層下から馬の歯		〃
143	浦和市駒馬よろい塚	〃	方形	一辺18.0×約3.4		付近から石櫃出土中世における信仰の塚		63
144	江南町大字小江川，新山遺跡第1号塚	丘陵上	略円形	2.5×0.4-0.5				
145	同　第2号塚	〃	円形	3.4×3.0×0.6		頂部に五輪塔頭部有		
146	同　第3号塚	〃	略円形	4.4×4.1×0.96	5	盛土中より寛永通宝，1枚出土		
147	同　第4号塚	〃	楕円形	4.6×4.0×0.99	9	頂部に台石有		
148	同　第5号塚	〃	長楕円形	5.7×5.4×1.27	10	頂部に庚申塔、盛土中巣石、古銭12枚出土3-4号塚とも縄文土器片石器、礫、出土	江戸前期	

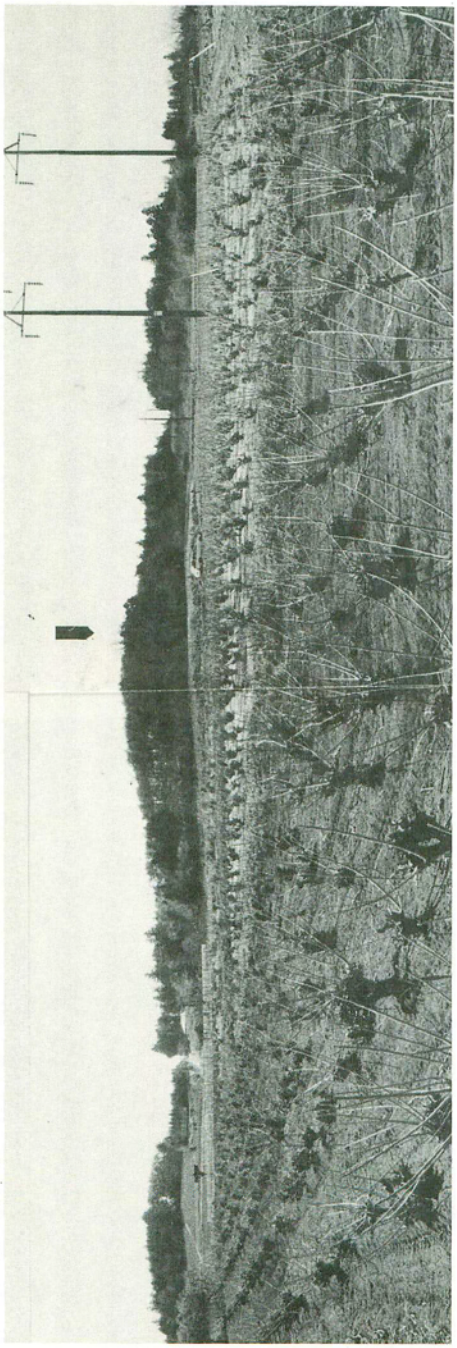
（1986年12月集成・新島）

図版

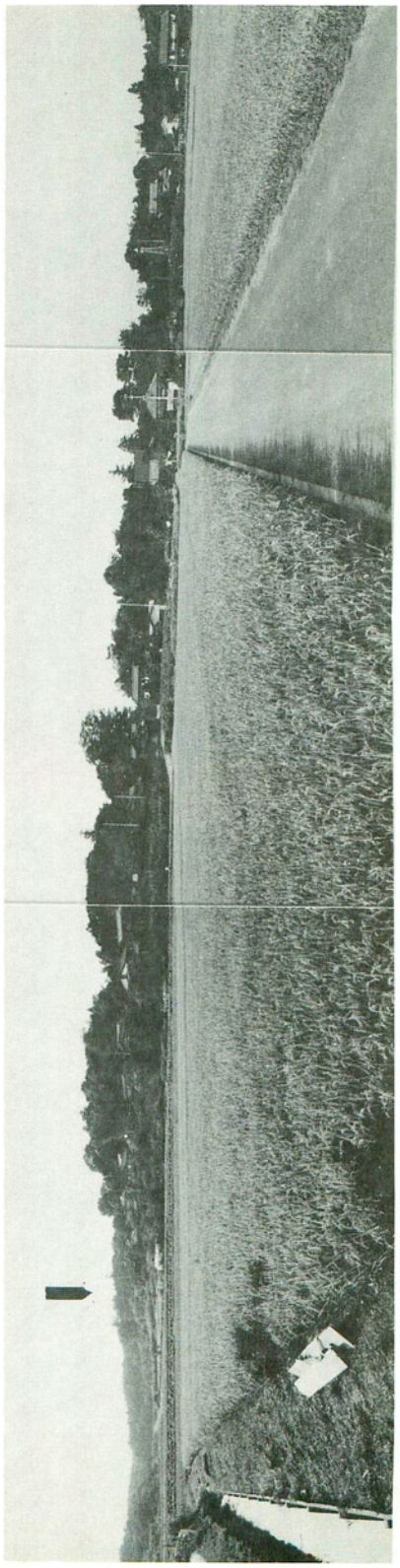


第24図　庚　申　塔

図版 1



北面より見た遺跡の位置（左）



南面より見た遺跡の位置（右）

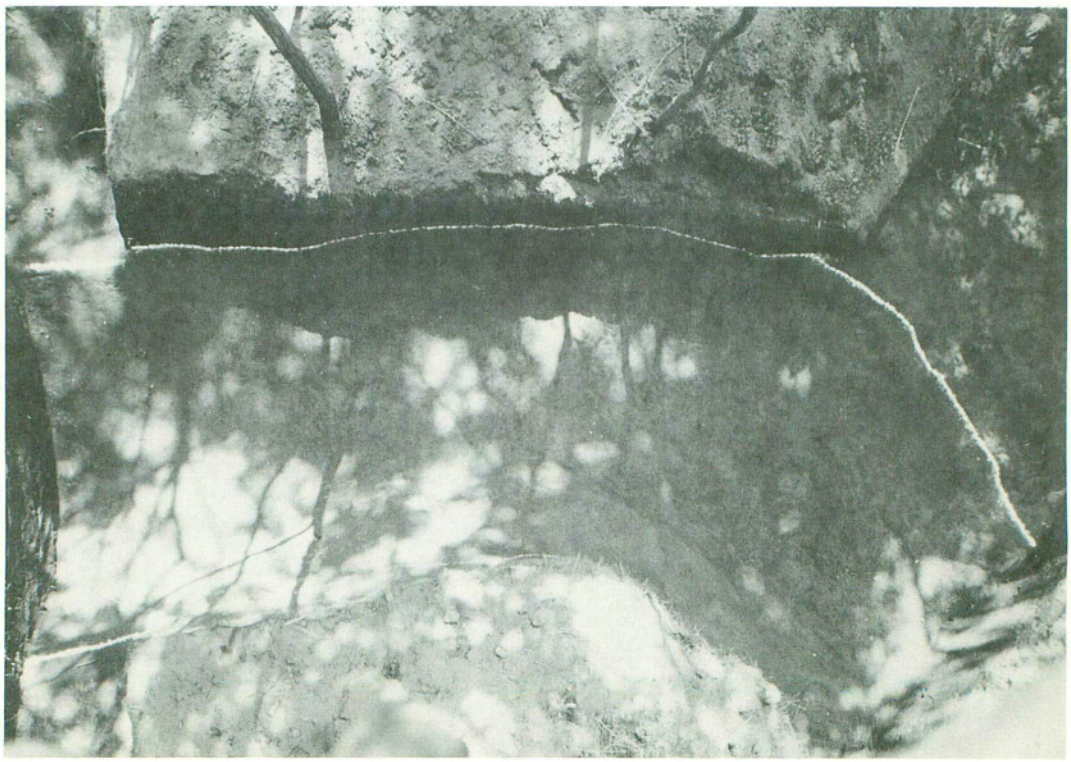
１、２号塚　調査前

３、４号塚　調査前

第 5 号 塚　調査前

第 6 号 墳　調査前

第６号墳　Ⅰ・Ⅰ′トレンチ



第６号墳　南西部周溝

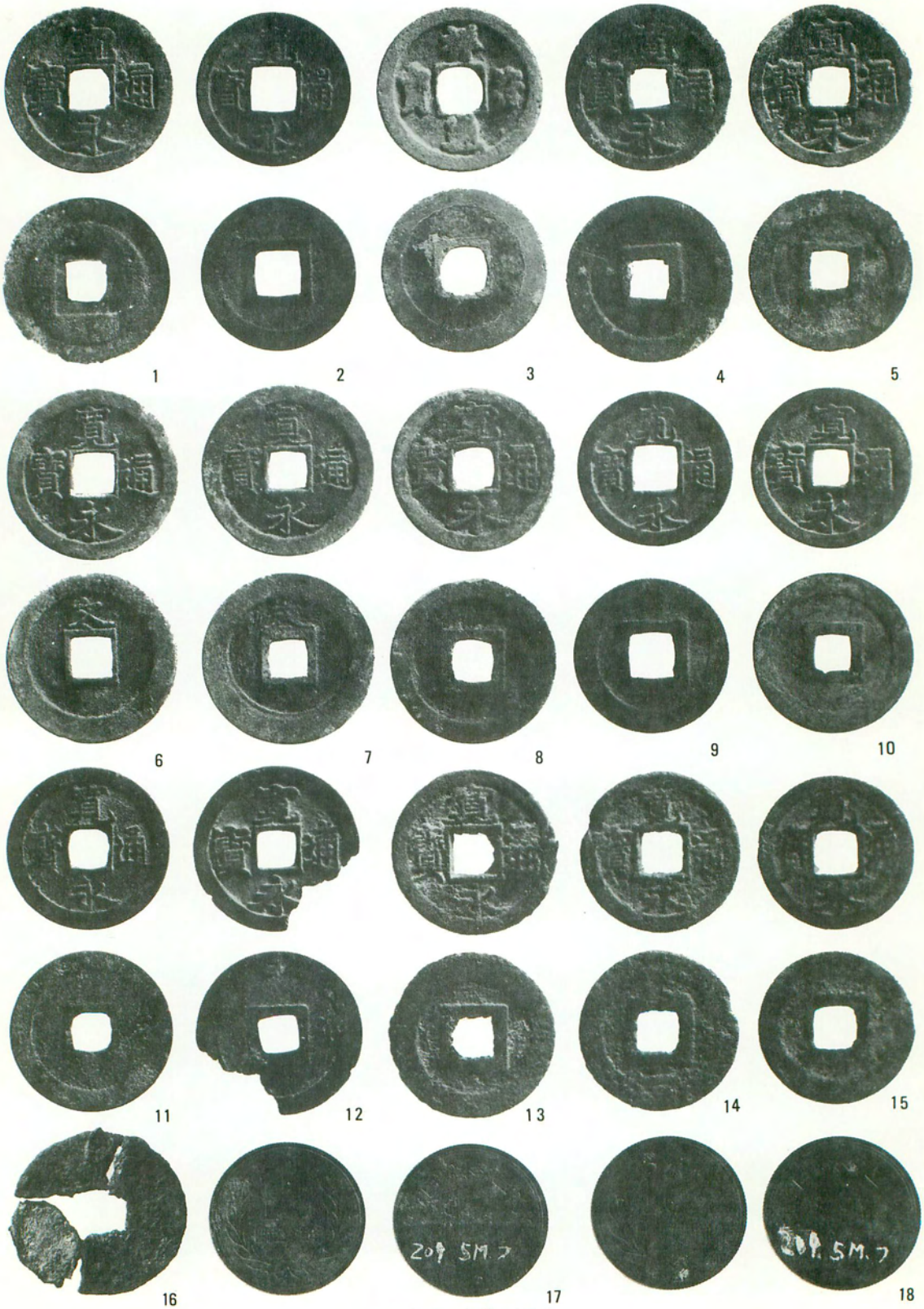
第５号塚　盛　　土

第５号塚　下層集石

第５号塚上の庚申塔

集石中　古銭出土状態

西ノ台　第２号塚上の庚申塔



塚出土 古銭・硬貨

キザミ目のある土器

炭化物の付着する土器

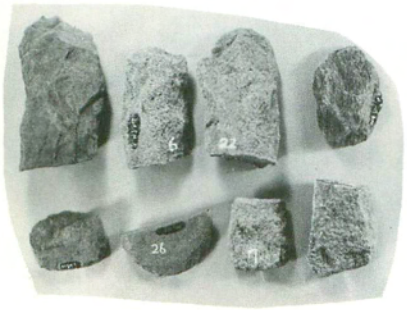
調査区出土縄文土器

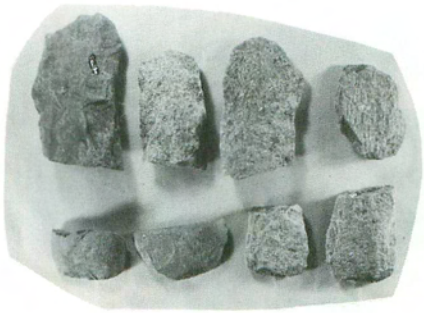
表採砥石

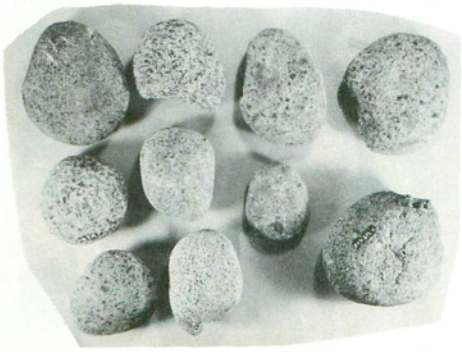
第6号墳出土 土 師 器

礫　　器

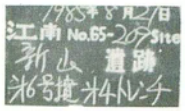
礫器・磨石・他







打 製 石 器


1983年8月27日
江南 No.65-207 Sine
新山 遺跡
第6号墳 第4トレンチ

昭和62年 3 月25日　印刷
昭和62年 3 月31日　発行

江南町文化財調査報告　第 6 集

江 南 町 内 遺 跡 群 Ⅲ
（ 新 山 遺 跡 ）

編集・発行　埼玉県大里郡江南町教育委員会
印　　刷　関 印 刷 株 式 会 社